
ミッドナイト・ディクティブ 真夜中の探偵

ドラキュラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミッドナイト・デイクタイプ 真夜中の探偵

【Nコード】

N5728G

【作者名】

ドラキュラ

【あらすじ】

神奈川県、横浜市の港に浮かぶ中古のクルーザーが私立探偵マローウの事務所だ。所長のマローウこと渡辺謙一と事務員兼恋人のステファン。彼ら二人は私立探偵として浮気調査や素行調査などをしているが、もう一つの顔がある。それは人間界に逃げた悪魔を逮捕、または射殺する仕事だ。彼らは通称をミッドナイト・デイクタイプ（真夜中の探偵）と言われている。

序章：平凡な朝（前書き）

作者の憧れフィリップ・マールウをモデルとしてみました。

途中でハードボイルドからオカルト染みたラブロマンスに変わってしまうので、本としては駄作と言えるかもしれません。ただ、作者のお気に入り！？

序章：平凡な朝

神奈川県、横浜にある横浜港に沢山の船が浮かぶ中にある全長30フィート（約10メートル）中型クルーザーが私の住み家兼事務所だ。

アメリカの中古艇を扱う船店で前々から貯めていた金を叩いて手に入れた宝物みたいな存在だ。

もつとも、それ以上の宝物が私にはある。

今、目の前で安眠枕に顔を埋めて眠っている金髪の女性だ。

肩まで伸びた金髪はベッドに散りばめられていて白いシーツからブラメンコの足を思わせる綺麗な美脚が見えた。

「ステファン。起きて。朝だよ」

私が揺らすと美脚美人はううん、と寝がえりを打った。

その仕草でも可愛いと思うのだから私は彼女に首っただけだ。

重症だが、それだけの女性という事だ。

「んー、もう少し寝かせてー」

可愛らしい声を出すステファンに苦笑しながら私は身体を自分の方向かせて額にキスをした。

「目が覚めた？」

「んー、おはよう。ダーリン」

ステファンは青い瞳を眠たそうに開けて私の頬にキスをした。

「さあ、顔を洗って来なさい。ご飯は出来たから」

はあいと言ってステファンはベッドから起き上がった。

白いYシャツ姿のステファンが何とも生々しい美脚を惜し気もなく出していて朝っぱらから見るには少々毒だ。

私はステファンの魅力ある足から視線を背けキッチンを目指し歩きだした。

ステファンは逆方向にある洗面所へと向かった。

キッチンに行った私は最後の準備を始めた。

今日の朝食はトーストと目玉焼きに生の野菜サラダだ。

飲み物はコーヒーと紅茶。

私がコーヒーでステファンが紅茶だ。

イギリス人を父に持ったからかステファンは無類の紅茶好きだ。

私はアメリカでの生活が長かった事もありコーヒーが好きだ。

「これで、よし」

私はステファンの朝食をテーブルに置いて自分の席に着いた。

「改めて、おはよう。マイ・ダーリン」

Yシャツと黒のミニスカート姿のステファンが私に改めて挨拶をしてきた。

「おはよう。奥さん」

私もニッコリと笑って挨拶を返した。

「毎日ありがとう」

ステファンは席に着いて礼を言った。

「気にしないでいいよ」

私は笑顔で言った。

彼女は朝に弱く料理の腕も最悪だ。

それは元イギリス貴族のご令嬢だからかもしれない。

彼女の父は元貴族だったが悪い不動産屋に騙されて多額の借金を残り死亡し母親も後を追うように病死した。

残ったのは当時大学生だったステファンで借金返済のために売春宿に売られそうになった所を駆け出したかった私が助けた事で付き合う

ようになった。

当時ピンカートン探偵社にボストン大学に在学しながらアルバイト生として就職していた私をステファンは優しく支えてくれて正社員となりアパートを借りて同棲してからも変わらなかった。

ピンカートン探偵社を退社して独立し、更に私の故郷である日本に行く事にも賛成してくれて付いて来てくれた。

日本に来たのは“ある方”からの頼みだった。

元貴族であるステファンは料理など一切だめだが乗馬、社交界の事情、フェンシングなどの嗜みはあるから今では仕事の相棒としても活躍している。

まさに夫婦二人三脚で探偵をしているのだ。

「どうしたの？私の顔に何か付いてるの？」

ステファンがトーストを齧りながら尋ねてきた。

貴族の令嬢としては、はしたないが私には見慣れた姿だ。

「いや、いつ見ても可愛い顔だなんて思ったんだ」

まあ、とステファンは頬を赤くさせる真似をした。

「日本人は世辞が上手いわね」

「いやいや。本当の事だよ」

ステファンと笑いながら私はブルーマウンテンのコーヒーを飲んだ。

第一章：悪魔探偵

「では、こちらにサインをお願いします」

ステファンが差し出した書類をテーブルに置いて依頼人に言った。

今、座っている依頼人は夫の浮気調査を依頼してきて依頼を終えたので、そのサインを頼んでいる。

「あの、本当に大丈夫ですか？」

依頼人の女が心配そうに聞いてきた。

浮気調査を頼んだと夫に知られるのを困っている様子だった。

「御安心を。我がMNT探偵事務所は依頼人との関係は死守します」

私は安心させるように笑った。

MNTとはミッドナイト・タイムの事だ。

アメリカに居た時に超高層ビルから見えた夜景に感動して事務所の名前とした。

もっとも別な意味も含まれているが、またの話にしよう。

私の笑みに依頼人は安心したのか書類にサインした。

「これで終わりです。では、また何かあったら連絡を下さい。いつ

でも力を貸しますので」

分かりましたと言って依頼人は事務所から出て行った。

「ふう。これで一件落着かな？」

「ダーリン。そろそろ休憩にしない？」

ステファンがテーブルにコーヒーを置いた。

料理などは出来ないがコーヒー位は淹れられると言って給水をしてくれる。

これまた美味いから今や休憩時間の給水は彼女の十八番みたいなものとなっている。

「そうだね。そろそろ休憩にしようか」

左腕に填めたロレックスの腕時計を見た。

時間は午前10時。

ティータイムには、ちょうど良い時間だ。

イギリス人は大の紅茶好きだ。

だから、午前と午後の休憩時間にも必ず紅茶を飲む。

その時間が私の休憩時間でもある。

ステファンは一人用のソファアに座り紅茶の香りを楽しんだ。

使用しているは高級茶葉であるディンブラの葉を使用している。

私も最高級のブルーマウンテンの濃くのある香りを楽しみつつコーヒーを飲んだ。

その時、不意に電話が鳴った。

白いコーヒー・カップをソーサーに置いてからデスク・テーブルに置いてあるリダイヤル式の凝った電話機の受話器を取って耳に当てた。

「はい。こちらMYT探偵事務所です。どういった御用でしょうか？」

私は軽快な口調で喋った。

「・・・久し振りだな」

「これは“伯爵様”。お久し振りです」

相手がいないのに私は頭を下げた。

ステファンも私の様子を見て背筋を改めた。

「少し仕事が入った。大丈夫か？」

「勿論です。で、仕事の内容は？」

私は少し緊張した声で尋ねた。

“伯爵様”の仕事は一步でも間違えれば即死に繋がる。

しかし、同時にアメリカの探偵時代を思い出すスリリングな体験が出来ると不肖ながら楽しく思う。

平和ボケした日本と違いアメリカの探偵は拳銃を所持する事が出来るし時たま撃ち合いになる事もあるからだ。

事実、私もアメリカとヨーロッパで何度かマフィアや警察と撃ち合いをした時がある。

「魔界で殺しを犯して人間界に逃げた悪魔を探して欲しい」

「分かりました。直ぐに居場所を突き止めます」

頼むぞ、と言って通話を終えた。

「ダーリン。“伯爵様”から？」

ステファンの問いに私は頷いた。

「魔界で殺しを犯した悪魔を一人、探して欲しいってさ」

私の答えにステファンは頷いた。

「真昼間だけど、ミッドナイト・タイム（真夜中の時間）、ね」

ステファンは紅茶を飲み終わると立ち上がった。

「そうだね。休憩は終わりかな？」

コーヒーを飲んで私も立ち上がった。

ここでミッドナイト・タイムのもう一つの意味を説明しよう。

ミッドナイト・タイム、真夜中の時間とは悪魔探偵を意味している。

まったく関係ない言語だが、悪魔たちは真夜中に行動を頻繁に起こす事からミッドナイト・タイムと名付けた。

恩人である“伯爵様”は人ならざる悪魔だ。

科学が進歩した今の時代には非現実的とも言える存在だが、それは人間が勝手に決め付けただけだ。

現には何度も悪魔を見て逮捕、射殺してきた。

人間界に逃げた悪魔を捜索し魔界に送り返すか射殺するのが悪魔探偵、ミッドナイト・ディクティブ（真夜中の探偵）が私のもう一つの顔であり事務所顔だ。

自室に戻り引き出しを開けて物を取り出した。

拳銃の入ったホルスターだ。

Yシャツとウエストコートの上から牛の革で作られたショルダー・ホルスターを左脇に吊るした。

ホルスターの中にはワルサーP38が入っている。

私の相棒で“伯爵様”から直々に頂いた代物だ。

弾は水銀を使った特注の銀弾で銃自体にも魔除けのエングレイブが彫り込まれているから魔物などが掴めば火傷を負う。

シヨルダー・ホルスターを吊るし終えてから紺の線の入った背広を着てサングラスを掛けて黒のトレンチコートから別れて生まれたステンカラー・コートを着て黒のソフト帽を被った。

ハードボイルドの定番とも言える格好で探偵として目立つし古臭いと同業者から言われるが私には私の拘りがある。

それにこのコートと帽子は、ちょっとした優れ物で防弾繊維に刃物などの攻撃に対する防御力も誇るボディ・アーマーだ。

これには何度か命を助けられたことがある。

右足のホルスターにも隠し武器としてベレッタM1934を入れて準備は完成した。

「相変わらず決まってるわね。ダーリン」

Yシャツの上から灰色の背広を着て更に灰色のトレンチコートを着て眼鏡を掛けたステファンが話しかけてきた。

髪は後ろで結わえられて白いうなじが見えミニスカートから見えるフラメンコの足は健在だ。

姿からすれば外国社長の第一秘書と言った所だ。

彼女も私の相棒を務めているため拳銃は常に持ち歩いている。

私と同じく左脇のシヨルダー・ホルスターにワルサーPKKを忍ばせているしミニスカートの中には25口径のベレッタ・ボブキャットを隠している。

ワルサーPKKにも魔物除けのエングレーブが彫られているし弾も水銀の特注弾丸が込められている。

「そっちも決まってるよ。奥さん」

サングラス越しに笑ってみせる。

「嬉しいわ。それでは、行きましょうか？」

「OK。行こうか」

二人揃ってクルーザーを出て近くの車庫に止めてある黒のロンドン・タクシー、オースチンFX4に乗った。

ステファンと一緒に彼女の故郷、イギリスに行った時に手に入れた物だ。

元は廃車同然だったが、“伯爵様”の舎弟が使えるように改造してくれた。

エンジンはスポーツカー並みにされボディやガラスも防弾にして機関銃とミサイルまで搭載された小型装甲車だ。

かなり……いや、とんでもない車だが外見は普通の車だ。

エンジンを掛けてギアをローに入れて発進させた。

他の日本車に混ざって運転した。

「何処に行くの？」

助手席に座ったステファンが聞いた。

「資料が送られてくるよ」

返事をした途端に取り付けられた小型ファックスから資料が出てきた。

一枚分で止まった。

「読んでくれないか」

ステファンは心得たように読み始めた。

「え、と名前はスコルスキー。性別は男。事件の経緯は酒場で酔った勢いで相手を刺し殺して人間界に逃亡して行方を眩ませているだつて」

「他には？」

「詳しくは後ほど連絡する。気を付けてやれとの事よ」

「気を付けて、か。何時もながら身を案じてくれるとは有り難いね」
私は心から思った。

危ない仕事を回しながら気を付けるなどと言う“伯爵様”。

優しいとはこういう方を言うのであるうと思ってしまう。

「本当ね。で、何処に行くの？」

「その男が最初に降り立った場所に行ってみよう。基本は現場から」
何処かの刑事ドラマで言うセリフを私は言った。

「えーと、現場は………あら。ダーリンが行こうとしていた大学よ」

私は大学という言葉に耳が鋭くなった気がした。

「もしかして、正考大学だったりする？」

あそこだったら正直に言っしまえば行きたくない。

「その、もしかしてよ」

無情なステファンの声には、はあと溜め息を吐いた。

「あそこ、かぁー。あそこは嫌な思い出でしかないのに」

何せ私が二度も受けて落ちた大学だ。

他にも理由はあるが……………

嫌な思い出しかない。

まあ、その正考大学に落ちたから“伯爵様”の力を借りてアメリカのボストン大学に現役で合格したんだけど……………

「はあ、何で大学に降り立つんだよ」

どうせなら廃工とか公園にしろと言いたくなる。

「そんなに落ち込まないで。私の“マールウ”」

ステファンが私の口に煙草を入れてきた。

銘柄はキャメルだ。

「貴方は最高の男よ。私にとっては、貴方が“フィリップ・マールウ”よ。しよげた顔を見せないで」

彼女は器用に運転をする口に銜えたキャメルに銀製のダンヒルのライターで火を点けてくれた。

「ありがとう。ステファン。君は最高の女性だよ」

私は安心させるように笑ってキャメルを吸い込んだ。

「……………ふうー」

窓を少し開けて外に煙を出した。

「さあて、気を取り直して行きますか」

アクセルを踏んでスピードを上げてからギアをハイ・トップに変えた。

一気にFX4はギョーンと走った。

「あはっ。やっと何時ものダーリンに戻ったわ」

ステファンは子供のように笑った。

その笑顔が本当に眩しくて私はサングラスを掛けながら目を細めた。

第二章：現場へ急行

正考大学は都内の渋谷側に存在する私立大学だ。

そんなに有名でもないがサークルなどは活発で美人も多いと隠れて人気がある。

そして私が二度も落ちた大学だ。

あれから既に5年は経過している。

5年も経過しているが、まったく変わってない。

「やれやれ。いつ見ても嫌な場所だな」

F X 4 を駐車場に止めて降りた私は辛気臭い溜め息を吐いた。

「さあ、行きましょう。ダーリン」

ステファンが励ますように言っつて私の腕を引いた。

「そうだね。行こうか」

自分に喝を入れて私とステファンは大学の中に入った。

大学は一般人でも入れるから私たちも難なく入る事が出来た。

まあ、警備員に怪しまれたから少し小金を握らせて黙殺させたが。

大学の中はボストンと同じく色々な学生がサークルや授業、学内デートを楽しんでいた。

「何処の国でも大学は楽しい場所らしいな」

私はコンクリートの道を歩きながら言った。

「そうね。親元から離れて一人暮らししてバイトにサークル。まさに人生の中でも一番楽しい時間かもしれないわね」

ステファンも頷いた。

「……それにしても、さつきから視線が気になるんだが」

「実は私も」

歩いてからだが、やたら私とステファンに視線が来るのを感じる。

まあ、私は衣装でステファンは類い稀なる容姿と美脚に視線が行くのだろう。

「さつきと現場を調べて帰ろう」

ステファンも頷いて足早に進んだ。

現場は大学の中にある芝生地帯で普段から多くの学生が食事などで来る事が多く“気”が混ざり易い。

「……ここが現場か。確かに“気”が混ざり易い場所だな」

肌で色々な“気”を感じて私は顔を顰めた。

全てが嫌ではないが負の感情がある。

そんな“気”が混ざり大きくなる事で稀に魔界に通じるらしい。

「ええ。これなら悪魔一匹、来る事も出来るわね」

ステファンも辺りを見回して頷いた。

「取り敢えず周りを調べるか」

私とステファンは二手に分かれて現場を回ってみた。

何処から出てきたのか調べるのだ。

私一人だと変な目で見られる。

今も変な格好してると陰口を言われた。

「やれやれ。……………ん」

溜息を吐いた時に何かを感じ取り視線を横に移した。

視線の先には大きな木があった。

そこに微かに“魔”を感じた。

「……………ここから出たのか？」

木に近づいて手を当ててみる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ここからか」

私は目を開けて確信した。

コートの中から銀の弾丸を取り出して木に押し込んだ。

これで悪魔が来ても魔界に逃げられない。

恐らく逃げる時もこの場所から逃げる筈と長年の勘で思ったからだ。

「これでよし」

背を向けて歩こうとした時だ。

「あー！！謙ーじゃん！！」

聞き覚えのある元氣過ぎる声。

・・・・・・・・不味い。

私はソフト帽を深く被り足を速めた。

「ちょっと！謙ー！止まりなさいよー！！」

声の主もスピードを上げてきた。

段々近づいてきた。

流石は運動部在籍の大学院生だ。

しかし、こっちも銃弾の雨を掻い潜ってきた足がある。

昔は負けたが今は負けない。

私は更にスピードを上げた。

周りでは行き成り始まった追いかけてここに眼を奪われていた。

「くう、やるわね！！だけど、これならどつよっ…」

ヒューン

何かが飛んで来る音が耳にした。

その瞬間に背中に衝撃が走った。

ゲバシッ！！

「……………」

私は悲鳴を上げそうになったが歯を食い縛り踏ん張った。

ドブシヤン

地面に勢いよく倒れる私。

それと同時にシユタと見事な着地をする音が後方からした。

「この私から逃げられると思った？」

ふふん、と勝ち誇った笑い声が聞こえた。

「……飛び蹴りなんて良い歳した女性がするもんじゃないよ」

取れたサングラスを拾いハンカチで汚れと顔を拭きながら立ち上がって諦めて後ろを向いた。

「久しぶりだね。由佳里さん」

「最初からそうしてれば良いのに」

由佳里さんは肩まで伸ばした茶髪を振り払った。

渡辺由佳里。

私の三番目の姉だ。

歳は25歳で正考大学の現役大学院生でフットサルのエースでもある。

私とは2歳しか違うから姉さんなどと呼ばずに由佳里さんと呼んでいた。

由佳里さんも友達感覚で私に接して来たのも理由の一つだ。

「……何か用？」

私が少し不機嫌な口調で尋ねた。

何時もなら冷静だが、家族であるし飛び蹴りが何気に痛かったから感情が少し出た。

「久し振りに会ったのに随分な態度ね」

由佳里さんは少し怒った顔になった。

その顔が妙に幼い印象を与えた。

一般男性なら可愛いと思うだろうがステファンがいる私には子供の笑みにしか見えなかった。

「・・・・・・・・」

私は無言で背を向けた。

こんな無駄な時間は過ごしたくない。

「ちょっと待ちなさいよ」

コートの袖を掴まれて止められた。

「・・・・用があるなら言って下さい。私は忙しいんです」

「ちょっとくらい姉と茶でも飲んで話そうとは思わないの？久し振りに会ったんだから」

「言った筈です。忙しいと」

手をやんわりと振り払った。

「では、失礼。由佳里さん」

軽く帽子を取って一礼して背を向けた。

「ちょっと待ちなさいよ!!」

由佳里さんが後を追い掛けてきたが私は立ち止らずに歩き続けた。

再び飛び蹴りを繰り出そうとする気配を感じた。

二度も同じ技を食らうほど馬鹿じゃない。

少し横に移動した。

その直後に由佳里さんの身体が通り抜けた。

ベシン

見事に尻から地面に着地した由佳里さんは尻を撫でた。

「痛い!!」

「自業自得ですよ。今度、暇な時にでも茶をしますから今回は失礼します」

由佳里さんの横を通過して私は芝生を後にした。

後ろから由佳里さんの声が聞こえたが気にせず歩き続けた。

大学を出てFX4に行くと先に来ていたのかステファンが缶コーヒーを飲んで待っていた。

「ただいま。奥さん」

私が喋り掛けるとステファンは何かを投げた。

片手で受けるとGEORGIAのエメラルドマウンテンの缶コーヒーだった。

「ありがとう」

礼を言ってから缶の蓋を開けた。

「どうだった？」

ステファンの問いに私は答えた。

「見つかったよ。弾丸を入れて逃亡阻止をしておいたから大丈夫だよ」

後は犯人探しだと言った。

「ええ。ここからが問題ね」

ステファンの言葉に私も頷いた。

「犯人が何処に居るかだ」

大抵は出た場所の近くに潜伏するものだが、稀に遠い所とかに逃亡したりする。

「まあ、その辺は“伯爵様”も手を貸すでしょ？」

そうだな、と言って私はエメラルドマウンテンを飲んだ。

適度な甘さが何とも言えない美味さだ。

「それじゃ事務所に帰りますか？」

FX4のドアに手を掛けた時だった。

「見つけたわよ！謙一！！」

「……しつこいな」

はあ、と溜め息を吐きながら視線を大学の方へ移した。

由佳里さんが蒸気した顔で仁王立ちしていた。

「誰？あの女？」

ステファンがギロリと怖い眼つきで睨んできた。

美人が凄むと怖いものだ。

嫉妬は嬉しいが眼つきが怖すぎる。

しかし、それほど嫉妬してくれるのが、また私のしがない男心を撥

つてくれて放さない。

「2歳年上の姉だよ」

話だけはしたる？と言うとステファンはああ、と頷いた。

「あれが由佳里さん。話で聞いた通りの元気あふれる女の方ね」

クスリと笑うステファン。

「元気があり過ぎて困るよ。さっきも飛び蹴り食らったし」

今頃になって腰が痛くなった。

「飛び蹴り？そう言えばフットサルのリーダーだっけ？」

「そう。お陰で腰が痛い」

「それなら運転は私がするわ」

ステファンが運転席に回ってきた。

「じゃあ、お言葉に甘えて」

助手席に回りドアを開けて中に入ろうとした。

「ちょっと！！私を無視するな！？」

由佳里さんがドシドシと足音を立てて歩いて来た。

「何ですか？今度お茶をするって言った筈ですよ」

いい加減にしつこいと私は思った。

「誰よ？その金髪女は」

私の言葉を無視し運転席のステファンに鋭い視線を送る由佳里さん。

「彼女は私の相棒兼恋人のステファン」

「こ、恋人！！」

由佳里さんは面食らった顔をした。

「手紙で教えた筈だけど？まあ、そういう事だから失礼」

ステファンも一礼してドアを開けてエンジンを掛けるとFX4を発売させた。

ルームミラーから由佳里さんが怒鳴っている姿が見えたが気にしないようにした。

第三章：狙撃される

「何だか今日は疲れた」

まだ昼の12：30分なのに一日を終えた気がする。

まあ、由佳里さんの登場が原因だろうが……

「まだお昼よ？でも、あんなに元気な女性を相手にしたら疲れるかもね」

ステファンは運転をしながら小さく拭いた。

「昔から元気がある人でね。現役バリバリのフットサル選手も理由だと思うけど」

私はLARKを取り出して口に銜えた。

「昼食どうする？」

ステファンが聞いた。

「適当な店で食事でも取るかい？」

そうしようと言ってステファンは近くのレストランを探し始めた。

その横で私はキャメルをシガー・ライターで火を点けた。

「ねえ。ダーリン。あそこはどう?」

ステファンが指さす方向を見ると少し洒落た喫茶店だった。

「うん。良いかも知れない」

朝食はたっぷりと食うが昼食はあまり食べない。

それが私の食事だ。

ステファンはハンドルを切って喫茶店の駐車場に入った。

車から降りて中に入った。

入る前に煙草は揉み消してからだ。

「いらっしやいませ。何名様ですか?」

可愛らしいピンク色の制服を着た二十歳すぎのウェイトレスが迎えてきた。

「二人。喫煙席を頼む」

ウェイトレスは畏まりましたと言って席に案内した。

「決まったら言って下さい」

一礼してからウェイトレスは立ち去った。

「何にする?」

ステファンが一枚のメニュー表を開いた。

「レディ・ファーストで」

「ありがとう。ダーリン」

ウィンクしてステファンはメニュー表に視線を巡らした。

私は再びキャメルを取り出して防水マッチで火を点けた。

普段は喫煙を控えているが今日は一箱を吸い切りそうだった。

「私はサンドイッチにするわ」

はい、とステファンからメニュー表を受け取って視線をやる。

「・・・・・・・・」

キャメルを銜えながら見た。

どれも似たり寄ったりの料理に見えるとは、かなり疲れている証拠だ。

「・・・私もサンドイッチかな」

メニュー表を閉じてウェイトレスを呼んだ。

「サンドイッチを二つ」

畏まりましたと言ってウエイトレスは立ち去った。

「この後どうする？」

「そうだねえ。取り合えず事務所に帰って“伯爵様”に報告でもする？」

「それが良いわね」

ステファンは頷いてくれた。

先ずは“伯爵様”に報告してから詳しい情報を得て行動を開始しても遅くはない。

「それじゃ、昼食を済ませてから帰りますか」

私はキャメルを吸って煙を吐き出した。

程なくウエイトレスがサンドイッチを二つ持って来た。

私はキャメルを携帯灰皿に入れて揉み消した。

『頂きます』

二人揃って頂きます、と言ってサンドイッチを食べ始めた。

周りは昼時間でもあるためOLや会社員、大学生などがこっ互いしていた。

ここでも、やはり大勢の色々な視線を感じたが敢えて気にせずには

ンドイツチを食べ続けた。

卵と野菜にマヨネーズが挟まった食パンが何とも良い味を出していた。

ああ、日本の料理は美味しいと思う。

悪く言うては何だが以前まで居たアメリカの料理は日本人である私には合わなかった。

油っこいパンに魚、肉、全てが油で作られているのではないかと思うほど油コツテリだった。

おまけにポリユームも半端ではないから食べ切るのに時間が掛った。

向こうに住んでいた時は出来るだけ自分で料理をして油っこい物を口にしなければならなかったものだ。

それに比べてヨーロッパの料理は良く合ったものだ。

ポリユームも適度だし油なども控え目で美味しかった。

このサンドイツチもそうであると思いつながら私は最後の一切れを食べ終えてから食後のコーヒーを頼みステファンは紅茶を頼んだ。

直ぐにコーヒーと紅茶はきた。

簡単なインスタントだろうが我慢しよう。

コーヒーを一口飲もうとした時だった。

「謙一!!」

ドアの方から数十分前に聞いた声がした。

「……今日は厄日か？」

はあ、と溜め息を吐きながら振り返った。

「大声を出さないで下さい。由佳里さん。他の客に迷惑です」

コーヒーを飲みながら叱咤した。

「あんたが逃げたから悪いのよ」

由佳里さんは頬を膨らませた。

その様子をステファンは黙って見ていた。

彼女らしいと言えば彼女らしい。

元貴族令嬢であるため人前では自分の感情をコントロールできるように常人よりも幼い頃から仕込まれている様になっていた。

「忙しいと言っていた割には恋人とコーヒーを飲む時間はあるんだ？」

皮肉たつぷりに言う由佳里さん。

この辺は昔から変わらないと思う。

「食後のティータイムです。それより大学はどうしたんですか？」

「今日は午前中で終わり。部活も休みだしね」

「そうですか」

適当な返事をしながら、何で今日に限って休みなんだと思いつつながら
コーヒーを飲み終えてキャメルを銜えた。

本当に今日は一箱吸い尽くしそうだ。

「煙草は身体に毒だぞ」

LARKを口から取り上げた。

「知ってますよ。それより早く席に着いたらどうですか？通行の邪魔
だしウェイトレスさんにも迷惑ですよ」

新たなキャメルを取り出して口に銜えた。

「うっ」

正確な指摘をされて由佳里さんは渋々といった感じで離れた席に座
った。

「由佳里さん、こっちを睨んでるわね」

面白そうに笑うステファン。

その笑顔が眩しくて由佳里さんの怒った顔など埒輪みたいなものだと感じた。

「ほっとけば良いよ。もうすぐ出て行くんだから」

火を点けたキャメルを吸いながら私はステファンが紅茶を飲み終わるのを待った。

「今日は事務所に帰ったら、じっとしましょう」

私の身を案じてくれる言い方だった。

「そうすると有り難いね」

クスリと笑い返した。

ステファンが紅茶を飲み終わると席から立ち上がり金を払って店を出た。

由佳里さんを見ると食事中だった。

これなら追い掛けて来れまいと内心で笑いながら私はステファンが運転席に座ったFX4に乗り込み道路へと出た。

FX4に揺られながらキャメルを蒸かして私は犯人をどう探すか考えた。

『……大学に出たって事は少なくとも都内か神奈川県の何処かに居る筈だ』

いざという時に逃げる為に大抵は隣国（ここでは県だが）程度の場所に潜伏しているものだ。

人間に混ざる者、闇に紛れて罪を犯す者のどちらかに限るが果たして今度の相手はどちらか。

もしも人間に混ざり生活しているなら温和に説得して魔界に返すが罪を犯しているなら容赦など要らない。

ワルサーの弾を相手の腹にぶち込んで動けなくなった所を縛り上げて魔界に送り返せば良いだけだ。

「ねえ。ダーリン。さっきから後ろの車が付けて来るんだけど……」

ステファンがルームミラーを見ながら喋った。

「……もしかして由佳里さん？」

「……その通りだわ」

私は頭を抱えなくなった。

ここまで行くと軽いストーカーだ。

「私たちの事務所を探す積りじゃないかしら」

「だろうね。……振り切れる？」

「もちろん」

ステファンは挑発的な笑みを浮かべてアクセルを限界まで踏みギアを変えてスピードを一気に上げてタクシーを引き離れた。

「……やれやれ。これで一安心かな？」

私はキャメルを灰皿に捨てて溜め息を吐いた。

それから一応の警戒をしながら車庫にFX4を入れて事務所に戻ろうと足を港へと向かわせた。

その時だった。

プシュ、プシュ

小さな音が二つ私とステファンの髪を掠った。

「ステファン！！」

「ええ！！」

私の声に頷いてステファンも周りを見てから拳銃を抜いた。

銃声の方向に視線をやると丘の上から黒ずくめの男が一人いて背を向けて去って行った。

「……警告か」

ワルサーに安全装置を掛けてからホルスターに収めた。

「恐らくね」

ステファンもコルトの撃鉄を戻してホルスターに入れた。

甲板に当たった弾は貫通していなかった。

「見張り頼むよ」

私はステファンに見張りを頼み懐からガーバー社のフォールディングナイフを取り出して弾を抉り取った。

ナイフを仕舞いステファンに声を掛けてから事務所のクルーザーに戻った。

「弾は？」

「22LR弾だよ。恐らくルガーMK 1アサシンズかMR7だろうな」

競技弾の22LR弾は、殺傷能力は小さいが、サイレンサーを付けた銃で撃つと消音効果が抜群で暗殺用としてCIAなどが使っていた事がある。

アメリカの警察も負傷する弾が22LR弾であるため決して侮れない。

「たぶん後者のMR7じゃないかしら？向こうとの距離は結構あるし拳銃では難しいでしょ？」

ステファンが私の為にコーヒーを出してくれた。

「そうかもしれないな。どっちにしろ初めてのケースだね」
警告とも言える銃撃。

こんな事は初めてだ。

「ええ。何だかバツクに大きな奴がいるような気がするわ」

ステファンも自分の紅茶を淹れながら頷いた。

「とりあえず報告だな」

私はデスクに置いてある受話器とは別に客人を迎えるためのテーブルの下に置いてある黒の受話器を取り掛けた。

「はい。こちら夜鴉家です」

“伯爵様”の片腕の執事であるヨルムさんが電話に出た。

「ヨルムさんですか？マーロウです」

「これはミスター・マーロウでしたか。お久し振りですね」

ヨルムさんの言葉に私は居ない相手に一礼した。

「何か御用ですか？」

「はい。実は、“伯爵様”から頼まれた悪魔の事で、お話がありま
す」

「少々お待ち下さい」

受話器を置く音がして暫く待つと“伯爵様”の音がした。

「どうした？」

「実は先ほど狙撃されまして」

「・・・狙撃？」

“伯爵様”の声が鋭くなった。

「はい。事務所に帰ろうとした所を。故意に外していました。恐らく警告ではないかと」

「分かった。俺の方も調べてみる。力が必要なら言え。直ぐに出す」

「ありがとうございます。その時は必ず連絡します」

失礼します、と言って受話器を置いた。

「“伯爵様”は何と？」

ステファンが紅茶をソーサーに置いて聞いてきた。

「力が必要なら言えってさ」

「何時もながら有り難いわね」

「うん」

私は頷いてからステファンが淹れてくれたコーヒーを飲んだ。

適度な温度で実に飲み易かった。

第四章：プロポーズ

これ以上、調べるなという警告である狙撃をされてから私とステフ
アンは悪魔の探索を始めた。

あんな脅しで屈するほど軟な男でもないし障害が大きいほど燃える
ものだ。

“伯爵様”から送られた資料を頼りに奴が出入りしそうな場所を探
索したが、ちつとも見つからない。

これには少し苛立った。

「どつという事なんだ？」

私はディスクの上で乱暴に両足を置いて組んだ。

探索を始めて一週間が経過した。

その間に得た手掛かりは皆無だった。

普通なら幾つかの有力な情報を手に入れて余裕だったが、今回はま
ったく手に入らない。

ホームレスのネットワーク、知り合いの魔術師による探索、果ては
オカルト団体が掲載しているサイトなどを調査した。

意外とサイトなどには有力な情報があるが全て空振りだった。

一体どういう事だ？

「ただいまー」

ステファンがドアを開けて中に入ってきた。

「どうだった？」

「駄目ね。ちつとも無いわ」

首を振るステファンに私は溜め息を吐いた。

「どういう事なんだろうね？」

「私にも分からないわ」

はあ、と溜め息を吐くステファン。

その時、受話器が鳴った。

苛立った心を落ち着かせてから受話器を取った。

「・・・はい。MNT探偵事務所です」

「俺だ」

“伯爵様”の声だった。

「申し訳ありません。まったく情報が手に入らなくて・・・」

「

言い訳を先に言った。

役に立たない自分が酷く情けないと感じたからだ。

「気にするな。俺の方で調べたが奴は指定暴力団、銀星会の幹部として生活している」

「銀星会……暴力団の幹部ですか？」

悪魔が暴力団の幹部とは可笑しな話だ。

しかし、暴力団の幹部となれば私の情報網でも掴めるはずなのに何でだ？

「お前の網に引っ掛からなかった事を見ると、口止め何かがされたんだろう」

私の考えを読んだように言ってきた。

「なるほど。緘口令が敷かれたとなれば納得がいきます」

一人で頷いた。

「人間界に降りて、どうやら魔術を使って幹部に成り上がったらしい」

「なるほど。そうでしたか」

「ああ。お前らを狙撃した奴もそいつの回し者だろう。こうなると

捕縛ではなく射殺しても良い」

「畏まりました」

「また何か遭ったら連絡する」

じゃあな、と言って通話を終えた。

「銀星会って最近になって妙に力を付け始めた暴力団でしょ？」

ステファンの質問に頷いた。

「うん。麻薬、闇金、未成年売春って最低最悪の事を平気でやる組織だよ」

ヨーロッパ全域を牛耳っているマフィアの“伯爵様”も売春はやるが、それは自分の意思で来た女性とか限定だ。

決して無理やりはしない。

それに麻薬と闇金にも手を出さない。

それに比べて銀星会の奴らは借金の形とか無理やりだ。

人を壊す麻薬に鬼畜とも言える闇金にも手を出すと正しく畜生以下だ。

まあ、一般人から見れば“伯爵様”も立派な悪党でしかない。

加えて言うなら、そんな悪党である“伯爵様”に仕える私も裏街道

を歩く立派な悪党である。

別に後ろ指を指されても平気だから良い。

「麻薬に闇金と売春とは最近の悪党は仁義の欠片も無いわね」

やだやだとステファンは言いながら紅茶を淹れ始めた。

その乱暴な仕草で苛立ちが解った。

同じ女として麻薬漬けにしたり借金の片に身売りさせたりする銀星会のやり方が気に喰わないのだ。

彼女自身も身売りされ掛ったから、外見だけの同情などはない筈だ。

「戦う相手が分かった以上は、相手の行動パターンを調べないと」

「恐らく私たちに警告した所からして護衛とかは万全でしょうね」

ステファンは自分の紅茶を淹れ終えてから次に私のコーヒーを淹れ始めた。

「まあ、そっちの方が面白いけどね」

私は一週間も無駄骨だったせいで鬱憤が溜まっていたから暴れたい気持ちが高まってきた。

暴力団となれば相手にとって不足はない。

寧ろ壊滅させてやりたい位だ。

私はLARKを取り出して吸い始めた。

本日、二箱目のキャメルだ。

そして、その日は情報を得た事を祝って外食を取る事にした。

行き先は過去に何度か行った事がある横浜港に浮かぶ海上レストランとして有名な中華料理店だ。

オーナーは中国人でシェフも中国人だ。

金に汚く威張り腐るオーナーは好きになれないが、無骨ながら気配りの上手いシェフは好きだ。

高級店であるため格式が高くラフな格好では行けない。

だからパーティーなどで着る正装に、と言っても私は普段着と大して変わらない黒のタキシードに着替えた。

これを着たのは昨年にヨーロッパで“伯爵様”の誕生日をマフィアの幹部たちと盛大に祝った時だ。

ステファンも去年、私と一緒に出席したパーティーで着た紺色のパーティー・ドレスに身を包んでいた。

露出した肩と胸を形式的に隠すように黒のストールを掛けていた。

その姿が何とも言えない神秘的な美しさを誇っていて私は暫し見惚れていた。

紺色のドレスに金の髪を頭の上で団子状に纏めて薄く化粧してピンクのルージュを塗った姿は妖艶な妖精を思わせた。

恐らく世の男どもを虜にする事だろう。

「どうかしら？マーロウ」

軽くドレスの裾を摘んでみせるステファン。

その仕草を取っても美しかった。

「……とても綺麗だよ。ステファン」

私は仰々しい位に一礼して右手を差し出した。

「今宵は、私のような道化と一緒にディナーに行ってくださいませんか？妖精の姫」

気障なセリフに態度を見せる私と同じようにステファンは膝頭まである裾を両手で摘んで会釈した。

元が付くが貴族令嬢であるため画になっていた。

「喜んで行きますわ。ミスター・マーロウ」

「恐縮でございます」

私はステファンの手を取り事務所を出て車庫に向かいミッドナイト・ブルーのBMW・ミニクーパースに乗りレストランに向かった。

「ダーリンと外食なんて久し振りね」

ステファンは子供のようににはしゃいでいて、その横で私は本当に子供のよな女性だと思った。

彼女と出会って早5年。

私も彼女も当たり前だが歳を取った。

5年の間、彼女は文句の一つも言わずに私と行動をして来てくれた。何があっても傍に居てくれて、どんな状況でも私を支えて助けてくれた。

そろそろ、結婚を考えても悪くはない。

“伯爵様”からもステファンを放すなと言われた。

『あんな出来た娘は珍しい。放したら一生を後悔して過ごすことになるぞ。だから、何が合っても放すな』

重い言葉だ。

結婚と言う檻の中に彼女を入れるのは心が痛むが、私は彼女と一緒にになりたい。

「……ステファン」

私は意を決して口を開いた。

こんなムードの欠片も無い場所で告白するのも彼女に失礼だが、言わないといつ言えるか分からないから続けた。

「なあに？」

「……この仕事が終わったら……私の妻となってくれない？」

言った。

とうとう言ってしまった。

「……」

ステファンは無言だった。

こんな車内でのプロポーズに流石に呆れ果てたか？と思い、チラリと視線をやると大きな胸が顔を包んだ。

「ありがとう！！ダーリン！？結婚しましょう！？」

前を素晴らしいバストで包まれて息苦しさ快感を感じながら、私は運転中だと思いだし勘でハンドルを切った。

ピーー！ピーー！

激しいクラクションの音がしたから、どうやらギリギリ交わしたようだ。

「ステファン。今は運転中だから放して……！！！」

私の言葉にステファンは慌ててバストを放した。

まだバストの感触が顔に残っている。

「ごめんなさい。嬉し過ぎて……」

ごめんね、と二度謝るステファン。

「でも、嬉しいわ。私と結婚してくれるなんて……」

「君ほど私を理解している女性はいないし、君ほど素晴らしく放したくないと思う女性は何処にも居ないからね」

「私も貴方ほど私を理解して、素晴らしい男性は何処にも居ないと思うわ」

互に見つめ合い笑った。

「それじゃ、さっさと犯人を片付けて式場を探さないとね！！」

「ええ！！」

頷くステファンを見てから私はクラッチを踏みサイドからトップへと変えアクセルを踏んでスピードを上げた。

ギューン！！

猛々しいエンジン音がして勢いよくスピードは上がり夜の道路を走

つ
た。

第五章：狙撃者と対談

レストランに着くと直ぐに駐車場にミニ・クーパースを止めて玄関へと向かった。

ステファンは、さっきから私の左腕に自身の腕を絡ませて身体を密着させてきた。

よほど私のプロポーズが嬉しかったようだ。

少し歩き辛かったが、気にせずに私たちは玄関を潜った。

自動ドアが開きボーイが出迎えた。

「いらっしやいませ」

私の姿を見ると深く一礼するボーイ。

「こちらへどうぞ」

席が空いてないとか予約したのか聞かずに席へと案内してくれた。

案内してくれたボーイにチップとして1万円を二枚ほど握らせてから去らせた。

「ねえねえ。ダーリン。何処で式を上げようか？」

ステファンは式の事を話してきた。

「まだ早いよ」

苦笑したがステファンは減るもんじゃないと言って何処が良いかと聞いてきた。

「んー、ヨーロッパが良いんじゃないかな」

“伯爵様”を始めとした方々はヨーロッパに居るし、彼女の故郷もヨーロッパだ。

「ヨーロッパだとイギリスかフランスが良いわね」

「私も賛成だよ」

「ダーリンはどっちが良い？」

「んー、どっちかと言えばフランスかな」

出来るならマルセイユ港で式を上げたいと思った。

マルセイユには“伯爵様”も住んでいるし、シーフード料理が何よりも美味しい。

「私はイギリスが良いなー」

ステファンは反対の国を言った。

彼女の故郷であり両親の墓もあるから故国で式を上げたい気持ちも解る。

「まあ、その辺はこれから相談しようね」

うん、とステファンは頷いた。

話しを一時的に打ち切るとボーイが料理を運んで来た。

シュウマイ、餃子など中国を代表する料理だ。

回転式の丸皿にシュウマイなどを置くとボーイたちは再び去って行った。

「それじゃ、食べようか」

私とステファンは日本の箸より長く丸い箸を器用に使い料理を皿に分けて食べ始めた。

「うん。美味しい」

相変わらずの腕前だと思った。

ステファンも美味しいと言ってシュウマイを食べた。

料理を食べて話しをしていると北京ダックも運ばれてきた

北京料理の代表的な料理だ。

アヒルを一匹丸ごと焼いて小麦粉の皮にアヒルの皮を包んで食べるのが通常で残りの肉などは肉料理などにして食べる。

私とステファンも大好物な料理だ。

無口な料理長が直々にダツクの皮を切り小麦粉の皮に包んで渡してきた。

「ありがとう」

礼を言つて受け取る。

料理長は無愛想な顔ながら一礼した。

彼なりに照れているのだ。

「頂きます」

私とステファンは互いに北京ダツクを食べた。

料理長は美味しいと言う私たちに深く一礼してから厨房に戻って行った。

「耳が赤いわ。相変わらずの照れ屋さんね」

ステファンは小さく笑いながら北京ダツクを食べた。

「そこが彼の良い所でもあるよ」

私はシュウマイを頬張りながら答えた。

他愛無い話をしているとボーイが何か叫ぶ声が聞こえてきた。

「……………さまつ。困ります!!!か、勝手に……………」

ボーイの言葉を無視するように歩いてくる足音。

私たちの方に近づいてくるのが分かる。

「・・・・・・・・」

私は椅子の向きを変えて身体ごと振り返った。

足尾との主は私と目と鼻の先で立ち止まった。

服装は黒一色で黒い瞳が死人のように暗かった。

『この男だな。狙撃したのは』

ほぼ直感的に感じた。

ボーイが男の後ろで焦っているのを見て心配ないと眼で合図して去らせた。

周りも何事かと興味津々だった。

「・・・・・・・・ミスター・マロウだな」

質問ではなく断言だった。

「Yes。その通りだ。狙撃者君」

手を組んで微笑む私。

ステファンはパーティー・ドレスの裾を託し上げて隠しているトムキヤットに手を掛けているのを背後で感じた。

「警告は聞き入れなかったようだな」

暗い声だった。

「生憎と服従しないのが十八番でね」

憧れのフィリップ・マーロウの十八番を口にしてみせた。

他人に服従しない私だが自ら膝を折り服従するのは“伯爵様”だけだ。

「今度は、こつちから警告だ。大人しく投降すれば手荒な真似はしない。君の組織にも手は出さない。だが、投降しないなら……」

私はコートの中に手を入れた。

「……その言葉、後悔するなよ」

男は一瞬だけ死人の眼から悪鬼の眼にして私を睨んだが、捨て台詞を残し去って行った。

「……後悔するのは、どつちかな？」

去った方向を見て呟いた。

「さて、夕食の続きをしようか？」

ステファンに向き直った。

「とんだ邪魔が入ったわね」

せつかくの夕食を邪魔されてステファンは怒っていた。

「まあね」

苦笑しながら私は“伯爵様”が送ってきた情報が確かだと証明された。

「さて、こうなると向こうは何をして来るか分からないし、急いで決着を付けるしかないかな」

あの様子だと狙撃どころか爆弾を使ってくる可能性も高い。

「今夜中にミスター・アキヒサに連絡するかな」

私は同じく“伯爵様”に仕える人物の名前を言った。

アキヒサ、彼の名を知らぬ者は裏世界では居ない筈だ。

武器商人にその人ありと謳われる日本人で私より10歳も年上で落ち着いた態度と獣の如く五感に優れている。

元は営業マンだったらしく、“伯爵様”の薦めで武器商人となり世界を股に掛ける武器商人となった。

彼とは狩猟で馬が合い大掛かりな悪魔を相手にする時などに武器の

調達などをしてくれたり共同で戦ってくれる頼もしい仲間であり先輩だ。

「彼ならどんな武器も直ぐに用意してくれるわね」

賛成というステファン。

「そうと決まれば帰ろうか。何だか興醒めしたから」

ステファンは、また賛成と言った。

まだデザートも出されていないが、何だか男が現われたせいで食べる気が無くなった私とステファンは足早と店を出た。

ミニ・クーパースまで行き鍵を入れようとした時だ。

『……………車内に不穏な物資が入っております』

静かな事務的な声がクーパーから出てきた。

“伯爵様”の義弟が付けてくれた探査機の声だ。

「不穏物資はC4プラスチック爆弾です」

機械的な声に私とステファンは素早く周りを確認した。

周りは車だらけだ。

C4ならリモコン式で爆発する。

そうならば辺り一面が火の海で逃げられない。

「爆弾を解除しろ」

私が命令する。

『命令により爆弾を解除します』

車内で爆弾を解体する微かな音が聞こえてきた。

『爆弾解除、完了しました』

解体した爆弾は特殊な液体で浄化され気体となり排気ガスとなり排出される。

爆弾が解除されてからクーパーに乗り込んだ。

「やれやれ。この様子だと住み家にも仕掛けられてそうだな」

エンジンを掛けながら私は溜め息を吐いた。

ステファンはポンポンと私の肩を叩いてくれた。

クーパーを走らせながら私は車内に搭載した電話でミスター・アキヒサに電話を掛けた。

ブルルルルル

少し間が合った。

「こちらアキヒサ」

若くなく年寄り過ぎずと言った声が聞こえてきた。

「ミッドナイト・ディクタイプのマーロウです。ミスター・アキヒサ」

「これはミスター・マーロウ。久し振りだね。何か用かい？」

アキヒサの声には親しみが込められていた。

「実は“伯爵様”の命で少し銀星会とかいう暴力団と戦うんですが、武器の調達を」

「ちょっと待ってくれないか？銀星会と言ったのかい？」

アキヒサの声が少し荒くなつたのを感じた。

「え、ええ。銀星会ですが。どうかしましたか？」

少し戸惑いながら尋ねた。

「私も銀星会に個人的に用があるんだよ」

どこか怒りを感じた。

「何やら訳ありのようですね。では、私がそちらに向かいます。場所を教えてください」

アキヒサは鎌倉の別荘に居ると答えた。

「ステファン。聞いての通りだ。少し寄り道するよ」

彼女が頷くのを確認してから私は鎌倉へと目指しクーパーをフル・エンジン全開にして走らせた。

第六章：ウールヴヘジン

アキヒサの別荘は鎌倉の外れにある一軒家だ。

煉瓦で作られた壁に車が数代は入る車庫に軽いガーデンングが出来る庭といった少し羽振りの良い家を思わせる。

武器商人である彼は世界中を飛び回り休暇の時は一人で北欧の山奥やアラスカを馬に乗り横断するなど冒険を繰り返している。

日本の別荘には数年に一度か二度来るか来ないかだ。

しかし、ちゃんと手入れなどもされていて人が住んでいると思えてしまう。

「あれは……」

クーパーを停車させて降りようとした時だ。

車庫の中に違法改造よろしくのバイクがあった。

しかも四台も、だ。

「彼の趣味じゃないわよね」

ステファンが首を傾げた。

間違っても彼は、こんなバイクは乗らない。

彼はバイクよりも馬を好むし違法改造は好まない。

私も彼も改造はしているが外見は変えていない。

「まあ、行ってみるか」

玄関に行きライオンの顔をしたドアノックを叩いて名乗った。

「マーロウです。ミスター・アキヒサ」

ガチャリとドアが開いた。

「……誰だ？てめえ」

ドア越しから見えてきたのは白い特攻服に身を包んだ男だった。

男というより未成年に見える。

恐らく18、19歳だろう。

「私はマーロウ。ここの家主。草神彰久の友人だよ」

柄の悪い青年を刺激しないように柔らかな口調で言った。

「……入りな。ただし、変な真似をしたら殺すぞ」

入る前から脅し文句を言うとは何とも言えないな。

分かったと了承してから私とステファンは中に入った。

靴を脱いでリビングに行く。上半身に包帯を巻いた灰色が掛った褐色の髪をした三十代後半の男が一人用のソファに座り、それを護るよう前を歩く彼と同じ服を着た青年が立っていた。

手には金属バットや木刀が握られていた。

一つの答えに行き着く。

『……暴走族か』

今の子供たちにしては珍しいと思った。

今は掟やグループなどに縛られるのを嫌い完璧な無法者が溢れている。

そんな世の中で古臭いとも言える暴走族をしている彼らに私は興味を持った。

「やあ。マーロウ。出迎え出来ずに申し訳ない」

灰褐色の髪をした男、アキヒサが苦笑して喋った。

「いきなり白い特攻服を着た青年が出迎えた時はビックリしたよ」

私も苦笑して答えた。

「怪我をした私を気遣ってくれたんだよ」

アキヒサの言葉に案内した青年は照れたように頭を掻いた。

「それで、その怪我はどうしたんだい？」

左胸と右肩に左脇と合計三ヶ所の傷口を見て尋ねた。

「銃で撃たれたね。しかも、中国製のトカレフやマカロフじゃなくイタリア製かアメリカ製のベレッタM92で撃たれたね」

私の推理に四人は目を見張った。

どうして分かったのかと思っている。

これでも探偵。

彼の身体から放たれる硝煙の臭いと小口径の9mm弾の大きさの弾痕から推理しただけの事だ。

「流石は探偵。鋭い洞察力だね」

アキヒサは微笑した。

微笑すると額の皺が小刻みに浮かび上がり彼の苦勞が分かる。

「君の推理通りだよ。三ヶ所ともベレッタM92Fの9mmルガー弾で撃たれた」

彼は言い終わると見た目からは想像も出来ない強靱な筋力を浮かび上がらせて包帯を力づくで剥ぎ取った。

キツク結ばれていた筈の包帯は糸も簡単に身体から取られた。

包帯を外した彼の身体には銃痕が三つあった。

それ以外にも古い傷跡が幾つか見えた。

撃たれた銃痕はまだ完治してないが、もう皮膚が張り後もう少しで完全に塞がる。

たった数十分前に撃たれたのに驚異的な回復力だ。

「流石は“ウールヴヘジン”と言われるだけではありませんね。もう傷が治りかけているなんて」

彼の異名に改めて眼を見張ってしまつ。

ウールヴヘジン……北欧神話に出てくる狼の戦士で訳すると狼のジャケットを着た者となる。

軍神オーディーンの神通力を受け戦では狼の如く勇ましく戦う事でベルセルク（熊の戦士）と同じく知られている。

アキヒサは狼の如く五感に優れて狼のように勇ましい事から“伯爵様”の従者から名付けられた。

もつとも、本当の意味でも彼は“ウールヴヘジン”であるが……

「ありがとう。マローウ。さて、長話はこの辺にして本題に入ろうか」

彼は礼を言うてから切り出してきて私とステファンは頷いた。

先に私が話し始めた。

彼らが気になったがアキヒサは大丈夫だと言ったから話した。

“伯爵様”から依頼され狙撃され銀星会の正体を知り、さつきも爆弾を仕掛けられた事を。

「……という訳なんです」

「なるほど。という事は私の方と同時かな」

アキヒサは角のある顎に手を当て思案した。

「今度はそつちですよ」

何だか一人で考え始めたアキヒサに話しかけた。

「ああ。すまない」

謝ってからアキヒサが経緯を話し始めた。

外国から戻った彼は休暇を日本で久し振りに取るうとしたらしい。

そんな時に偶然に暴走族と出会い、その女総長を叩きのめし今の四人と知り合った。

そして、彼女たちが麻薬で仲間を殺されたのを聞いて力を貸して銀星会に行き当たったらしい。

私とステファンが食事をして狙撃者と話し合っている時に彼の方でも銀星会から刺客が来て彼を撃ち一緒にいた女総長を誘拐した。

「バックに指名手配中の悪魔が居るなら、もう少し用心するんだっ
たよ」

ギリツと拳を握るアキヒサ。

「・・・・・・・・・・」

私とステファンは黙ってアキヒサを見た。

「・・・・・・・・・・」

暫く沈黙が部屋を包み込んだ。

「・・・・・・・・その指名手配の悪魔、譲ってくれないか？」

不意に喋ったアキヒサの言葉に私とステファンは顔を見合わせた。

「譲ってくれないか？と言う事は・・・・・・・・・・」

「私が始末したい」

沈めていた顔を上げるアキヒサ。

琥珀色の瞳がギロリと獲物を狙う狼の如く光っていた。

身体からも只ならぬ雰囲気を出していて四人が身震いしていた。

「……良いでしょう」

私は首を縦に振った。

「……感謝する」

アキヒサは深く一礼した。

「さあ、そうと決まれば銀星会のアジトに乗り込みますか」

アキヒサは頷いた。

ステファンに至っては私の意見に初めから賛成していたのか頷いた。

四人の青年は黙っていたが、意を決したのか自分たちも何か手伝わせてくれと言ってきた。

「俺らはいいつ等のアジトの内容も大体は分かるから、きっと役に立ちます」

私たちを出迎えた青年がアキヒサに懇願した。

お願いしますと残りの三人も懇願してきた。

アキヒサは私を見た。

一応、私にも聞きたいようだ。

『……彼らの心も組んで上げた方が良いでしょう』

彼は頷いて同行を許した。

彼らは大げさに頭を下げ、礼を言った。

こうして私とステファン、アキヒサの三人と暴走族を含めた連合が完成する事になった。

上半身に上着を着てからアキヒサの家にある地下室に私たちは降りた。

アキヒサが地下室の鍵を開けてドアを開けた。

中に入ると一面に重火器が揃っていて四人は目を見張っていたが私とステファンは見慣れていた。

「好きな物を取って構わない。君らは拳銃を持ちなさい」

落ち着いた口調でアキヒサは後ろの四人に言った。

四人は分かりましたと言って銃を選びだした。

「君はこれだろ」

アキヒサは私に銃を二つ投げた。

片手で銃を受け取る。

ウィンチェスターM73ランダルとイングラムM10だ。

西部を征服した銃と謳われるレバー・アクション式ライフル、ウイ

ンチエスターM1873をギリギリまで切り詰めてスピッコッキング（レバーに手を入れたまま、回転させて弾を装填するテクニク方法）が簡単にできるようにレバーを大きくしたカスタム・ライフルだ。

口径は44で銀弾を発射できる代物だ。

イングラムM10は特殊部隊用に作られた小型サブマシンガンで45ACPと9mmの二種類の口径がある。

かなり扱いが難しいが持ち運びも便利で私には頼もしい相棒だ。

ちなみに私のM10は9mmだ。

「ステファンさんにはショットガンだったね」

次にアキヒサはステファンにレミントンM870を手渡した。

アメリカのレミントン社が作り上げたポンプアクション式でモスバーグM500、イサカM37、ウィンチエスターM1300などと一緒にショットガンの定番として挙げられる。

ステファンは非人道的武器としてヨーロッパでは忌み嫌われるショットガンを好んで使っている。

彼女のM870は先の方に銃剣を取り付けられるように改造されている。

私たちに武器を渡してからアキヒサは自分の武器を手に入った。

フィンランド軍が使用しているヴァルメRk62突撃銃だ。

AK47を踏襲して作り上げた突撃銃で弾も7.62×39弾を使用し使い勝手が良い事からフィンランド国防軍の間では人気がある。

アキヒサはRk62に銀の7.62×39弾を箱型湾曲弾倉に装填した。

続いて彼は二振りの刃物をベルトに巻き付けた。

スペインの老舗ナイフ・メーカー、アライストール社の代表ナイフとも言えるジャングル・キングだ。

映画、ランボーでシルベスタ・スタローンが使用したナイフで有刺鉄線を切れるようにノコギリ状になっていて堅い肉も簡単に切れる鋭い刃を持っている。

握りの中には釣り糸やマッチ、釣り針などが入っていて一本だけでジャングルを制覇できる。

もう一つの刃物は日本製の竹割り鉋だ。

熊の毛皮で出来た皮の鞘に入った鉋を樫の木で作られたシンプルな柄を右手で握って感覚を確かめるアキヒサ。

ジャングル・キングより刀身が厚く白く輝くジャングル・キングとは対照的にドス黒く輝きを放つ鉋には何処か“得たいの知れない”気を感じる。

「それが“袈裟掛け”ですか？初めて見ました」

私は目を細めた。

“ 袈裟掛け ” とは彼の持っている鉈の異名だ。

袈裟掛けとは1915年に北海道の留萌苫前村にある三毛別六線沢で発生した日本最大最悪の熊害事件（ゆうがい）に登場するヒグマの名前だ。

この事件は冬眠に失敗したヒグマが北海道に来た開拓民7名を死亡させ3名に重傷を負わせるという悲しい事件だ。

日本で熊狩りをしていたアキヒサも、この袈裟掛けと同じ位の大きさを誇るヒグマに襲われた。

しかし、彼は持っていた鉈でヒグマの頭蓋骨を陥没させて袈裟掛けに斬り殺し何とか難を逃れた。

この時にヒグマの血が鉈に染み付いて黒くなり前よりも切れ味が良くなったらしく熊の霊が取り付いたと言われて袈裟掛けと呼ばれるようになったと聞く。

彼が襲われた場所も北海道で殺した熊も100年前に起きた事件と同じく袈裟掛けと呼ばれる人食い熊だった。

「 彰久さん。準備ができました 」

ふと四人の声で私は思考を中断した。

四人はワルサーPKK、シグ・ザウエルP230を持っていた。

護身用としては十分な威力を誇る拳銃だ。

まあ、恐らく彼らが銃を使う事はないだろう。

「……よし。それでは、“狩り”に行こうか」

アキヒサが狼の如く鋭い犬歯を出して笑った。

「OK。真夜中の狩りの始まりだ」

私とステファンも彼に合わせるように笑って見せた。

第七章：潜入

私が運転するミニ・クーパーSに四人の青年を乗せてからアキヒサは先頭を切りベントレー エイトに乗り込み走り出した。

「……彼、大丈夫かしら？」

助手席に乗ったステファンが心配そうに言った。

敵地に乗り込むからアキヒサの家にあった男物の衣服に身を包んでいた。

私も動き易い服装だ。

もともと帽子とコートは着ているが。

今の彼は我を忘れていたのではないかとステファンは思っている。

後ろの四人もどこかアキヒサの事を心配している様子だった。

「大丈夫さ。彼は自我を失うほど頭に血が上ってない」

まだね、と付け加える。

「彼が自我を失ったら、その時は私が命懸けで止めるよ」

ウールヴェジンの彼が自我を失えば悪魔探偵の私が全力で止める他ない。

「……ダーリン」

ステファンが瞳を潤ませてきた。

「まあ、そんな事にはならないと思うから心配ないよ」

クスリと笑って彼女にハンカチを渡す。

本当なら指で涙を掬ってやりたいが、後ろの青年たちには刺激が強いと思いきえた。

「ところで君らの総長だけど、アキヒサとはどういう関係なんだい？」

私はバック・ミラーで四人を見て聞いた。

「どういう関係って……それは……」

四人は返事に戸惑った。

「友達以上恋人未満って所かい？」

私の推理というか推測に四人は頷いた。

「まあ、推測だけど君らの女総長の両親は仕事に感けて自分を顧みない。そこで悪い事をして気を引こうとした。しかし、気を引く所か親は離れて行き自暴自棄になっていた所をアキヒサと出会った。……こんな所で、どうだい？」

四人は凶星を指されたのか頷くだけだった。

大方の検討は着いていた。

族などという不良集団は大抵が自分を認めて欲しかったり誰かに構って欲しいという気持ちを抱えている。

ただ表現の仕方を知らないだけだ。

今の大人は逃げてばかりで子供と向き合おうとしないから、こつこつ子供たちが増える結果になってしまったと思う。

アキヒサの性格から考えるなら、彼らを見過ごす事が出来ずに手を差し伸ばしたと簡単に想像は出来る。

そして、その中でも女総長はアキヒサの行動に一番刺激が強く与えられて気が付いたら惹かれたのではないかと推理する。

「女総長が彼に恋する気持ちも分からなくはないわ」

ステファンが大げさに頷いた。

「私はダーリン一筋だけど、彼って優しいし気が利いて謙虚で好きな相手には尽くすタイプだから人気なのよね」

おまけに何処か哀傷が漂っているとステファンが言った。

「確かに彼みたいな男性は女性に好かれるからね」

実際ヨーロッパでは男らしい冒険家で仕事ができるビジネスマンとして若い女の子から絶大な人気を誇っている。

彼女ら曰く『紳士的な態度だが、何処か悲しい背中が魅力的』らしい。

“伯爵様”もアキヒサと似ているからモデルのかもしれないな。

「まあ、君らの総長と彼がどうなるか分からないけど、まずは助けないと」

場の雰囲気や和み始めた所で私は気持ちを引き締めるように言った。

「女総長はどうなっていると思う?」

ステファンが聞いてきた。

「彼らの立場から考えると、生かして人質にしていると思うな」

私が銀星会の立場なら来るであろう敵に備えて女総長は殺さず人質として生かしておく。

「私も同意見ね。アキヒサとの関係を知っているなら尚更ね」

ステファンの言葉に四人は顔を強張らせた。

「まあ、撃たれて直ぐに助けに行くとは流石に思っていないだろうか、そこが潰れ込む点だね」

四人の態度を気にしながら喋った。

「アキヒサがウルヴヘジンだと向こうも知ってないのもポイント

ね

ステファンがワルサーPKKの安全装置をカチツと外しながら言った。

「確かに狼の彼なら嗅覚で場所を直ぐに特定できるからね」

相槌を打ちながら私もワルサーP38を取り出して片手で安全装置を外した。

アキヒサの車を追って一時間が経過した頃だった。

横浜の外れまで来ていた。

後どの位なのだろうと思っていると彼が道路から外れたので習って外れた。

漆黒のベントレー エイトが道路から外れて近くの路上に止まった。

私も合わせてミニ・クーパースを少し離して止めた。

ベントレーからアキヒサが降りた。

黒の皮ジャケットを着たアキヒサが右手にヴァルメRk62を握って出てきた。

ベルトにはジャングル・キングと袈裟掛けが吊るされていたが新たにヒップ・ホルスターが取り付けられていた。

銃口が抜き身でていた。

S & a m p ; W M 2 8 ハイウェイ・パトロールマンだ。

S & a m p ; W 社が警察官用にと作った物だが、余りに重すぎるため警察官の拳銃としては採用されなかった。

しかし、ベトナム戦争では特殊部隊が正式装備ではないが、バックアップ・ウェポンとして使用したりハンターがサイド・アームとして使用している。

肩まで伸びた灰褐色の髪が無造作に後ろで束ねられていた。

「……ここが銀星会のアジトだ」

R k 6 2 で前方に立つ巨大な建物を指す。

5メートルは優にあるコンクリートの壁が周りを取り囲んでいた。

壁の中には森林で中央に白く洒落た洋屋敷があった。

「ヤクザの割には洒落た屋敷だ」

皮肉気に笑う。

ヤクザのアジトであるため周りには民家などは何一つなく道路だけが広がっていた。

まあ、誰が好き好んでヤクザのアジトの近くに店や家を建てるものか。

「先ず最初に私が行く。君らは後から来てくれ」

彼は早口に言うのと勢いよく走り出し糸も容易くコンクリートの壁を跳び越えた。

文字通り跳び越えたのだ。

ロープも何も使わずに、ただ助走を付けてジャンプしただけで5メートルの壁を跳び越えた。

「相変わらず大したジャンプ力だ」

四人は口を開けて驚いていたが、私とステファンには見慣れた光景だ。

「どの位で来るかしら？」

ステファンの問いに私は三本指を出した。

「三分だね」

彼なら3分もあれば、庭を護るボディ・ガードを皆殺しに出来ると確信していた。

ステファンは左手に填めたコーチの腕時計を見た。

「後2分ね」

2分もあれば十分だよ、と言った。

それから2分後に内側からロープが投げられてきた。

「きっかり3分ね」

ステファンが腕時計を見ながら言った。

「……君らは、ここに残りなさい」

私は後ろを振り返り四人に残るように言った。

「何でだよ!!」

一人が私に食って掛ってきた。

「ここからは“殺し”だ。君らがしてきた“喧嘩”とは訳が違う。君らは、本当に汚れてはいけない」

族である彼等は“喧嘩”慣れはしてるだろうが、“殺し”はした事がないだろう。

一度でも手を黒く染めれば二度と白い手には戻らない。

アキヒサも彼らには真つ当な道を歩んで欲しいと願っているに違いない。

「てめえに言われる筋合いはねえ!!」

左端のリーゼントみたいな頭をした青年が私に殴りかかろうとした。

「……悪いが、少し眠ってもらおうよ」

私は青年の拳を避けて腹に一発入れると残りの三人も眠らせた。

四人をクーパーSに入れた。

「彼らを出すな」

『承知しました』

コンピュータの声を聞いてから私とステファンは壁に近づきロープを伝って壁を越えて中に潜入した。

私はウインチエスターM73ランダルをステファンはレミントンM870を構えて周囲を警戒した。

「……こつちだ」

アキヒサの声に反応して茂みの方に身を低くして近づく。

屋敷からは離れているが明かりもあるし警戒に超した事はない。

「見張りは？」

「始末した」

手短に答えるアキヒサ。

右手には血を吸った袈裟掛けが握られていてRk62は革製の紐で右肩に掛けられていた。

「屋敷の左側にボディ・ガード達が酒を飲んで屯っているらしい。女総長……美咲は奥にいる」

ボディ・ガードの一人に聞いたとアキヒサは話した。

そのボディ・ガードはどうしたと思ったが、直ぐに自分の考えを消した。

私が彼の立場なら情報を手に入れたら殺すからだ。

「……私は奥に行つて美咲を助ける。君らは、ボディ・ガードの眼を引き付けてくれ」

“伯爵様”から頼まれた依頼を彼に横取りされる形となっているが、了承済みであるため私とステファンは頷いた。

「……気を付けて」

アキヒサに言う。

「そつちもな」

短く言い返した彼は袈裟掛けを熊の皮で作られた鞘に入れてヴァルメRK62を持つと疾風の如く走り出した。

「私たちも行くのか」

ステファンは頷いてM870のスライドを前後に動かし初弾を装填した。

私もランダルのレバーを回して弾を装填した。

二人で一定の距離を保ちながら茂みなどを利用して屋敷に近づいた。

気分は頗る上々だった。

第八章：狙撃者と対決

アキヒサがボディ・ガードを始末した事から難なくボディ・ガード達が屯している左側に着けた。

明かりに当たらないように細心の注意を払いながら窓ガラスから中を覗いてみた。

見るからに人相が悪い男たちが黒い背広を着てウイスキーなどをラツパ飲みして大声で笑っていた。

テーブルの上にはベレッタM92FやコルトM4カービンやM16 A2などのアメリカ軍正式兵器が置かれていた。

「……流石は悪魔が裏で糸を引いているだけの事はある」

どう考えても日本のヤクザが持てるような物ではない。

武器を見て私は口笛を吹く真似をした。

「どうするの？ダーリン」

ステファンは少し緊張した声で聞いてきた。

「ここから見える人数は5人。アキヒサにも気を引けって言われているから、ここは派手に行こうか」

OKとステファンは言って低くしていた身体を起こし窓ガラス越しに自分の姿を見せた。

酒を飲んでいた奴らは目を見張ったが直ぐに銃を取ろうとした。

しかし、それより早くステファンが構えていたレミントンが火を噴いた。

ダアッン！！

大きな銃声と窓ガラスが粉々に砕ける音がした。

カシャン

機械的なスライドを前後に動かす音がした。

硝煙の臭いと白い煙が辺りを囲んだ。

「さあ、ダーリン。行きましょう」

私は頷いてイングラムM10とウィンチエスターM73ライダルを持ち砕けた窓ガラスのあった場所から中に潜入した。

砕けた窓ガラスから屋敷の中に潜入した私とステファンは辺りを見回し息のある者がいるか確かめた。

5人とも身体に殺傷能力の高いスラッグ弾を食らって息絶えていた。

もつとも酷かったのは目の前にいた男で腸が出ていた。

しかし、ステファンは見慣れているのか気にしていなかった。

狩猟で動物の解体などを行っているからかもしれない。

「さて、ここからどうしましょうか？」

「まあ敵が来る方角を目指そうか」

ステファンは楽しそうに笑った。

私も彼女も悪魔探偵などという職業に着いているため何処か普通の人間とは少し、いやかなり違う。

殺しが好きな訳ではない。

ただ、こういったスリルのある状態が好きなのだ。

私とステファンはボディ・ガードの死体を尻目に部屋を出て廊下を歩いた。

廊下には中世の甲冑やらが飾られていた。

「これはこれは、随分な歓迎だな」

私が笑うと甲冑達が動き出した。

手には剣や斧が握られていた。

大方、悪魔が魔力を使って動かしているに違いない。

こいつらを倒すのは簡単だ。

用は動けなくなるまで徹底的に叩きのめせば良いだけの話だ。

「君ら雑魚では役不足だよ」

私はM73ランダルとM10の引き金を同時に引いた。

バババババン！！

ダッ、ダッ、ダッ！！

9mmルガー弾と44ウィンチエスター弾が甲冑達を蜂の巣にしていった。

カチツ、カチツ

M73ランダルとM10の弾が切れた。

辺りは白煙だらけだが、気で甲冑達が迫って来るのを感じ取れた。

「ステファン。頼むよ」

私と入れ替わるようにステファンが前に出てレミントンを撃ち始めた。

ダアッ！！ダアッ！！ダアッ！！

カシユッ、カシユッ、カシユッ

銃声とスライドを動かす音がする傍らで私はM10に新たな32連発の縦型マガジンを装填しM73ランダルにも弾を補充した。

「ダーリン。交代よ」

ステファンのレミントンが弾切れのようだ。

「OK」

私が入れ替わるように前に出て再びウィンチエスターとM10を乱射した。

交互に交代しながら私とステファンは先に進んだ。

かなり時間が掛るが、甲冑みたいに急所がない奴らを倒すには確実な方法だ。

十五分くらい掛り甲冑を全部破壊した。

弾と時間の無駄になったが、仕方ない。

「さて、アキヒサの方に行くか」

甲冑の残骸を踏みながらステファンと廊下を歩き螺旋階段がある部屋へと出た。

一歩踏み出そうとした時だった。

ダンッ、ダンッ

立て続けに二発の銃声がした。

私はステファンを庇い跳んだ。

肩に衝撃が走ったが人体に損傷はない。

防弾繊維で作られたコートを着ているからだ。

銃声の方向を見ると螺旋階段の上からスコープを付けたオート・マチックライフルで、こちらを狙う男がいた。

私たちを狙撃した男だ。

「……ここまで来るとは恐れ入った」

死人のような生氣のない瞳を爛々と輝かせながら男は言った。

「悪魔探偵を舐めてもらっちゃ困るね」

皮肉気に笑いながら私はステファンと一緒に近くのテーブルを倒してバリケードにした。

ギリギリ狙撃者から身体を隠せられる。

「ここから先は通さん。貴様らを殺してから、あの男も殺す」

ゲタゲタと品のない笑い声を上げる狙撃者。

「どうしようか？ステファン」

「向こうは上。こっちを下。どう考えても不利よね」

私は頷いた。

「爆弾があれば柱を壊して奴を落とせるんだけどね」

階段を支えるのは太い鉄の柱で今の武器では壊せない。

「さて、どうしたものか」

対策を考えている間に狙撃者は撃ってきた。

バババババン！！

バリケードのテーブルを叩く音。

「M16A2か。厄介だな」

中距離での狙撃は最高水準を叩きだすM16A2で狙撃されては溜まりもない。

「早々に決着を着けないとヤバくない？」

ステファンの言葉に頷く。

「だけど、どうしようか？」

二人の武器を合わせてもM16A2に太刀打ち出来る武器はない。

アキヒサのヴァルメなら太刀打ち出来るかもしれないが、彼は奥だ。

ボディ・ガードの使っている武器は廊下を行かなければならないし

バリケードを離れないといけない。

そこを狙撃されたら終わりだ。

バババババン！！

バリケードを破り弾が襲って来た。

「どうしたら良いかな？」

伏せながら対抗策を考える。

「どうした？怖くて動けないのか？」

狙撃者の甲高い声が聞こえてきた。

挑発しているのが目に見えて分かる。

「完全に舐められているわね」

ステファンが額に青筋を立てていた。

「挑発に乗ったら奴の思う壺だよ」

冷静な声でステファンを止めた。

どんな時でも冷静さを失わないのも探偵だ。

「ははははは！！所詮、貴様らは雑魚だな？！」

狙撃者の階段を降りる音が聞こえてきた。

どうやら自分の立場が不動だと思い込み私たちに近づいてきているようだ。

これはこれで私たちにとっては好都合だ。

「ステファン。どうやら私たちに勝利の女神は微笑んでくれたようだよ」

私の言葉にステファンは怒りから嬉しそうな顔になった。

「そのようね。マーロウ」

バババババン！！

バリケードを破り弾が襲って来たが私たちは、じっと動かずに我慢した。

後もう少し近づけ。

そうすれば、こっちの勝ちだ。

サブマシンガンの射程距離はアサルトライフルよりも短い。

もう少し奴が来れば射程距離に入る。

コッ。

奴の足音が射程距離に入った。

今だ。

私は勢いよくバリケードから打って出てM10を階段に目掛けて撃った。

パパパパパン！！

9mmルガー弾が階段を撃ち抜き狙撃者の足を撃ち抜いた。

「ぐわっ！！」

狙撃者は悲鳴を上げて階段から身を落とした。

それを見逃さずにステファンがレミントンで撃った。

ダアッン！！ダアッン！！

二発のスラッグ弾が男の身体を撃ち抜いた。

カシュツ、カシュツ

カラン、カラン

スライドが前後し排出された弾が地面にぶつかり弾ける音がした。

ドサッ

男が地面に落下した。

足を撃ち抜かれ心臓を二発分の弾が貫通して男は絶命した。

顔は勝利から死へと変化していた。

私たちが負け自分が勝つと思っていたのに自分が負けて死ぬと信じられない顔だった。

「・・・過信が敗因だよ」

私は息絶えた男に言ってキャメルをコートから取り出して銜えた。

第九章：獣の雄叫び

狙撃者を殺した私たちは下へと降りた。

コンクリートで作られた無機質な階段を降りて行き鉄で出来た扉を
用心しながら静かに開けた。

ギギギギ

錆び着いた音を出しながらドアが開いた。

私が先に行きウィンチエスターM73ランダルを前方に出して警戒
しながら部屋に入りステファンが中に入った。

部屋の中は贅沢な家具で埋め尽くされているが、同時に拷問器具な
どと言った変態的な物まであった。

「・・・随分と良い趣味してるな」

随分と変態な悪魔だなと思いつながらアキヒサを探した。

しかし、何処にもアキヒサの姿はなかった。

あるのは贅沢な家具と変態な拷問器具、そして・・・・・・・・・・派手
に崩れたコンクリートの壁だ。

何か強い力で崩された感じだった。

「・・・・・・・・・・」

妙に嫌な予感がした。

「ダーリン。女の子が一人いるわ」

ステファンが崩れた壁とは反対側の壁で気を失っている娘を介抱していた。

気を失っているのは赤髪のロングに白い特攻服を着た20歳くらいの娘だ。

「この子が美咲さんだな」

私は確信しステファンに彼女を起こすように促した。

ステファンは心得ているのか首の辺りを押して彼女の意識を覚醒させた。

「う、んん……あんた達は誰？」

彼女は目を覚まし疑いの眼差しで見してきた。

まあ、疑われて当然だ。

「君は美咲さんだね？私はマーロウ。アキヒサの友人だよ」

安心させるように笑った。

「アキヒサ……おっさんは？おっさんはどうしたの？！」

おっさんとは随分と言われているな。

しかし、38歳だからおっさんと言われても仕方ないのか？

「それはこつちが知りたい。あの壁はどうしたんだい？」

指で崩れた壁を指す。

「あれは私に注射をしようとした男が、おっさんを投げ飛ばしたんだ」

注射と聞いて私は部屋を見て粉々に砕けた注射を発見した。

「……ヘロインか」

注射を持って臭いを嗅いで純度の高いヘロインだと分かった。

これを一本でも身体に打たれたら直ぐに麻薬の虜になる。

麻薬の中でも強い効果を持つヘロイン。

ヘロインを覚えたら地獄だ。

思い切つて止めるか死ぬまでヘロインの餌食となるかの二通りしかない。

アメリカで麻薬と戦う人間と麻薬に溺れる人間を何度も見てきた。

恐らく彼女にヘロイン入りの注射を打とうとした所をアキヒサが駆け付けて止めたが、悪魔に投げ飛ばされたと言った所だろう。

私は片膝を着いていたが、立ち上がった。

「ステファン。彼女を頼む。私はアキヒサを助けに行く」
分かったわとステファンは頷いた。

「待つて。私も行くつ。おっさんが心配だ!!」

背を向けた私を美咲さんがコートの裾を握って叫んだ。

見た目からは想像も出来ない可愛らしい事を言う美咲さん。

「危険だよ。それに、知らない方が良い」

私は極めて冷静で冷徹な声色で言った。

彼の姿を見たら、彼女は目を見張ると思った。

微かに臭った獣の臭い。

それは……アキヒサが変身した事を意味している。

その姿を見れば彼女は悲鳴を上げるに違いない。

それを私は避けたかった。

アキヒサの為にも彼女の為にも……

「あんたに言われる筋合いはない。私は、彰久を助けたいんだよ！」

！」

悲痛な叫び声を上げる美咲さん。

まだ会って間もないが、彼女が心からアキヒサを助けたいと思う気持ちで伝わってきた。

「彰久は私を助けるために戦っているんだ。それを尻目に逃げるなんて嫌だ！！」

微かに見えた涙に私の心は揺れた。

「ダーリン。私からもお願い」

ステファンも嘆願してきた。

同じ女として美咲さんの気持ちが理解したのだろう。

「……これを持って」

私はイングラM10を美咲さんの前に出した。

美咲さんは一瞬だけ目を見張った。

「……自分の身は自分で守りなさい」

美咲さんは何も言わずに奪い取るようにM10を持った。

その表情は何処か決意した様子だった。

「……私に着いて来なさい」

私は先導して崩れた壁を通りアキヒサの気が感じる方向に向かった。その後をステファンと美咲さんが追ってくる。

アキヒサの気を追っていると不安が確信へと変わってきた。

彼は変身して悪魔と戦っている。

それも本能を剥き出しにして………

『………“伯爵様”。どうかアキヒサを助けて下さい』

ここで神に祈るのが普通だろうが、私にとって神などよりも“伯爵様”に祈る方が自然だった。

神など所詮は役に立たない。

祈っても助けず、ただ傍観するだけの神。

そんな神に祈るより手を差し伸べてくれる“伯爵様”の方が祈り甲斐があるというものだ。

暫く走っていると何かが落ちていた。

アキヒサが持っていたヴァルメRk62だった。

弾は半数が残っていて全弾を撃つ前に落としたようだ。

あちらこちらに弾痕があり壁が破壊されていた。

何か強力な圧力などで壊されていた。

「……超音波の類か」

厄介な事だ。

私はヴァルメを背中に掛けると走り出した。

ステファン達も後を追って来た。

気を頼り追っていると壁などが進む事に凄まじく荒れてくるのが解った。

暫く進んで行くと何やら激しくぶつかり合い物が激しく壊れる音と獣の雄叫びが聞こえてきた。

ガウウウー！！

ガシャン！！

ウウアアウー！！

ドンツギシャー！！

「……油断しないように」

ステファンと美咲さんに言いながら私は緊張して汗を流す手でウィンチエスターを握り直した。

第十章：ヴェーア・ヴォルフ

緊張しながら音のする部屋へと入った。

目の前に広がるのは力づくで引き裂かれた家具と強い超音波の類により破壊された壁などだった。

その中で二匹の獣同士が血を流しながら戦っていた。

一匹は薄紫の色をして背中に蝙蝠の羽根を生やして額に鋭い角を出した獣。

もう一匹は灰褐色の毛皮を持った狼だ。

狼は二本足で立ち前足で翼の生えた獣を斬り裂こうとしていた。

………アキヒサだ。

私は、狼の姿となったアキヒサを黙って見つめていた。

彼は狼男と異名される通り人狼になる事が出来る。

これがウールヴヘジンの姿だ。

狼となり己が牙と爪で相手を殺す。

それがウールヴヘジンだ。

私は見慣れているが、後ろからは目を見張る声が微かに聞こえてし

まった。

美咲さんの声だ。

やはり、連れてくるのではないと思ってしまう。

人間ではないアキヒサ。

その姿を見せれば、きっと彼女は恐ろしい眼差しでアキヒサを見るに違いない。

そして予感は的中してしまった。

私たちの登場に気付かないアキヒサと獣。

「ガアウウウ!!!」

雄叫びを上げながら鋭い剃刀のような爪で翼の生えた獣を斬り裂こうとしたが、寸での所で獣は翼を広げて天高く飛び上り口を開けて何かを出してきた。

それは超音波の波だ。

肉眼では見えないが悪魔探偵の私には、ハッキリと見えた。

プウウウ

「グウウウ」

唸り声を上げてアキヒサは壁を斜めに飛び上り獣に飛び掛かった。

予想していたのか獣は、もっと空高く飛ぼうとしたがアキヒサの方が早く片足を掴んだ。

「ゲワアウー！」

ブンッ

鋭く猛々しい声と共に片手で獣を地面に叩き付けた。

それで地面が微かに揺れて足がふら付いた。

『何て馬鹿力だ』

私は何とか姿勢を崩さないでいたが後ろではステファンに支えられながら美咲さんが立ち上がっていた。

アキヒサの姿と地面が揺れたせいで尻もちを着いたのだ。

それ以外にも足が震えているのも含まれている。

「・・・・・・・・」

美咲さんは、ガタガタ身体を震えさせていた。

無理もない。

今、行われているのは人間同士の戦いではない。

獣同士の“殺し合い”などだ。

地面に叩き付けられた獣は片眼でギロリとシャンデリアにぶら下が
るアキヒサを睨んだ。

対してアキヒサは琥珀色の瞳を細めて右手をバキバキと鳴らした。

『……次で殺す気だ』

私は確信した。

「ガアウ!!」

アキヒサが勢いよくシャンデリアから跳び獣に襲い掛かった。

しかし、獣は超音波を放ち私たちの方に飛んで来た。

「ちっ!!」

私はウインチェスターを向けようとした。

ダアッ!!

大きな音と衝撃が頭に食らった。

「ダーリン!!」

ステファンが大声を上げた。

狙撃されたと分かった。

「……………く、くくくくくつ。まだまだ甘い、ぜ」

さつき殺した筈の狙撃者が身体から血を流しながら笑っていた。

その姿は異形だった。

どうやら獣の眷族となっただらしい。

狙撃されたが幸いにもソフト帽のお陰で無事だったが、獣のタックルで横に飛ばされステファンも獣に腕を掴まれ一緒に飛ばされた。

咄嗟に私はステファンを受け止めた。

勢いよく壁にぶつかり意識を失いそうになったが、何とか意識を保った。

しかし、敢えて気絶した振りをした。

ステファンの方も解っているのか気絶した振りをした。

「動くな!! 狼男!?!」

狙撃者が美咲さんの首にライフルを当てて叫んだ。

「意識はあるんだろ? この娘を死なせたくないなら、抵抗は止める」

「……………ゲウウウ」

アキヒサは唸り声を上げながらも動かなかった。

「くくくく。それで、良い。ボス大丈夫ですか？」

傷だらけの獣に尋ねる狙撃者。

「・・・何とか大丈夫だ。くそつたれが。人を騷りやがって」

獣はアキヒサに超音波を放った。

諸に直撃したアキヒサは後方の壁に激突した。

「グウツ」

悲痛な声を上げるアキヒサ。

「おっさん!!」

美咲さんが叫ぶ。

「へへへへ。もっと叫びな」

狙撃者は下駄な笑い声を上げながら首に当てていたライフルをアキヒサに向けた。

美咲さんは抵抗しようとしたが首を抑えられて無駄に終わった。

グググググ、と足が地面に着かないように上げられて美咲さんは、もがき苦しんだ。

その様子を楽しそうに見ながら狙撃者はライフルの引き金に指を掛けた。

「喰らいな！化物が！？」

ダダダダン！！

M16A2の弾をアキヒサは諸に喰らった。

「ウウガアウ！！」

アキヒサの唸り声が屋敷中に響き渡った。

灰褐色の毛皮が赤い血で染まった。

「てめえと、その二人組には散々な目に合わされたんだ。たっぷりと礼はさせてもらうぜ！？」

獣と狙撃者はゲタゲタと笑った。

その様子を私とステファンは黙って静かに見ていた。

「……ダーリン。どうする」

小声で訊ねるステファン。

「……このままだとアキヒサは髑り殺しにされてしまう。私たちも、変身と行こうか」

一気に決着を付けるには私たちも変身して倒すのが一番だと判断した。

「・・・OK。行きましょうか」

私とステファンは頷くと勢いよく走った。

ピイイイイ！！

グワアアウ！！

二匹の獣の鳴き声が響いた。

アキヒサと翼の生えた獣の鳴き声ではない。

私とステファンの鳴き声だ。

ステファンが美咲さんを抑えていた狙撃者の首に咬み付いた。

「ギャア！！ま、魔力が抜ける！！」

狙撃者の叫び声が聞こえた。

「不味すぎる血ね」

狙撃者の首から離れてステファンはペツと血の唾を吐いた。

ステファンの攻撃に私も勢いを掛けるように翼の生えた獣に素早く飛び蹴りを二発お見舞いしてやった。

「これでも喰らえ！！」

私は翼の生えた獣に素早く飛び蹴りを二発お見舞いしてやった。

「ぐはっ!!」

獣は口から血を吐いて後方に跳んだ。

その隙をアキヒサは見逃さなかった。

「グワアアウ!!」

雄叫びを上げながら血で赤くなった身体に鞭を打ちアキヒサは獣の喉元に咬み付き鋭い爪を相手の心臓にぶち込んだ。

・・・・・・・・ドシャー

大量の血が獣の身体から出た。

アキヒサの腕は獣の身体を貫通して緑色の血で染まっていた。

「・・・・・・・・くそ、獣が・・・・・・・・」

獣はアキヒサに憎悪の塊となった言葉を掛けて息絶えた。

「獣じゃない。ウールヴヘジン。狼の戦士だ。くそがっ」

アキヒサは荒い息で死んだ悪魔に向かって言った。

「さて、こっちは片付いた。次は・・・・・・・・こっちか」

私は背後から聞こえる弱々しい息の持ち主に向き直った。

「ぎ、ぎざまら………獣人だった、のか」

狙撃者は首から大量の血を流しながら地面に尻を着いていた。

もう直ぐ死ぬ。

誰が見ても一目で分かった。

「そうだよ。獣の騎士、ビースト・ナイト。またの名を“ヴェーア・ヴォルフ（戦狼部隊）”とも言うがね」

私は自分たちに付けられた名前を言った。

ヴェーア・ヴォルフ……ドイツ語で狼男、日本では暫し人狼部隊、狼人部隊と呼ばれている。

由来は狼男のアキヒサがリーダーで四人とも全員が獣であるためだ。

「は、ははっはははは。あのヴェーア・ヴォルフが相手だったとは、傑作だぜ」

高笑いした男は血を吐き出して息絶えた。

その様子を私とステファン、アキヒサは黙って見ていた。

美咲さんは未だ気絶したままだ。

「……彼女を頼む」

アキヒサは何処か鎮痛そうな顔で頼んで来た。

「貴方が助けたんだ。貴方がやるべきだ」

元から彼がした事だ。

最後まで責任は持つべきだと言おうとした。

しかし、アキヒサは首を横に振った。

「……こんな血塗れの身体では駄目だ」

自身の血で汚れた腕を見せて悲しそうに笑うとアキヒサはウォーンと鳴いて窓ガラスから出て夜の闇へと消えて行った。

あまりに哀し過ぎる背中をキツネと蝙蝠の姿となった私とステファンは黙って見続ける事しかできなかった。

その後、屋敷を後にした私たちはミニ・クーパースをステファンに運転させて自身はベントレーに乗ってアジトへと帰った。

第十一章：女は強い

私たちは自宅へと帰り気絶した四人を取り合えず事務所に寝かせて美咲さんだけステファンの部屋に同席してもらった。

シャワーを浴びると急速な眠気に襲われて泥のように眠った。

久し振りの変身で疲れが溜まったのかもしれない。

次の日に目覚めたのは10時を回っていた。

客室に行くとき四人は既に眼を覚ましていて私の姿を見るとアキヒサはどうしたのかと詰め寄ってきた。

「彼は無事だよ」

多少の手傷は追っているが敢えて心配させるような事は言わなかった。

「腹が減ってるだろ？今から朝食を作るから待ってなさい」

私は冷蔵庫から卵とハムに食パンを取り出してコンロに火を点けて調理を始めた。

「ああ。先に言っておくけど君らの女総長、美咲さんならステファンと一緒に寝てるから勝手に部屋に入らないようにね」

調理しながら四人に言っておく。

20分くらいで料理を作り終えテーブルに出す。

ハムエッグとフレンチ・トーストだ。

「食べていてくれ。私は少しステファンの部屋に行ってくる」

見た目からは信じられない位の上品さで食事をする四人に行ってはステファンの部屋へと向かった。

「ステファン。マローウだ。入って大丈夫かな？」

どうぞ、と言われてドアを開けて中に入る。

中に入るとステファンはフラメンコの足を優雅に組んでベッドに座っていた。

美咲さんはベッドの下で正座をしていた。

二人とも毛髪が乱れて荒い息を漏らしていて、ついさっきまで喧嘩をしていたのが分かる。

「これは、どういう状態かな？」

何とも困った状態であるのは分かり切っていると私は心の中で思いながらステファンに聞いた。

「この子。アキヒサさんに会いたいって言ってるの」

「アキヒサに？」

ステファンの言葉に耳を疑ってしまつ。

昨日の事を考えれば、アキヒサと会うのは嫌がると思っていたのに逆を言うとは驚いた。

「ダーリンの言いたい事も解るわ。昨日はあんなに怯えていたのに、今朝になって急に『おっさんに会わせる』って聞かないのよ」

はあ、と溜め息を吐くステファン。

「美咲さん。何で、アキヒサに会いたいんだい？」

私の質問に美咲さんは無言を通した。

「話せないなら彼には会えないよ。たぶん、もうあの家には居ない」

「……じゃあ、何処に居るのよ」

苛立った口調で聞いてくる美咲さん。

「知りたいなら理由を言いなさい。これは取引だよ」

もしも喋るなら力にもなると付け加えた。

これに釣られたのか美咲さんは重い口を開いた。

「……おっさんに一言、謝りたい」

「謝りたい？」

私とステファンは首を傾げた。

「あの時は、おっさんの姿に怯えた」

「それは仕方ないよ。あの姿を見れば普通なら怖がる」

彼女は人間だ。

異形の者を見れば怖がるものだ。

「でも！！おっさんは私を助けるために戦った。それなのに私は怖がって礼を言う事も出来なかった」

それが情けないと言う美咲さん。

「……お願いだ。おっさんの居場所を教えて。会って謝りたいんだよ」

ポロポロと涙を流し頼み込む美咲さん。

「安心して良いよ。彼は家を出て行っても、まだ日本に入るよ」

私の言葉に美咲さんは何処に居ると詰め寄ってきた。

「取引だっけって言ったでしょ？ちゃんと教えるし、力にもなるよ」

本当かと疑ってくる美咲さん。

「心配しないで。探偵は依頼人と信頼関係を大事にしているから」

先ずは顔を洗って飯を食べてからだよと言って私は二人に顔を洗うように言って新たに二人分の食事を作る為に再びキッチンへと向かった。

キッチンに行くと四人組は既に朝食を終えていた。

「美咲さんは？」

「ステファンと顔を洗ってる」

四人のうち一人の質問に答えて私は二人の朝食を作り始めた。

「彰久さんは何処に居るんだ？」

「たぶん山だね」

「山？」

四人は口を揃えて首を傾げた。

「山で獣を狩っていると思うよ」

四人は獣を狩る？とまたしても首を傾げていた。

「彼は商人であり有名な猟師でもあるんだよ」

武器商人であるアキヒサは有名な冒険家でもあり猟師でもあった。

日本では名前を知る者は少ないが世界では有名だ。

アラスカを一人で横断しアマゾン奥地をナイフ一本で生き抜いたり
と無茶苦茶な冒険をしてきた。

まあ、ウールヴヘジンである彼だからこそ出来るのだが。

四人組はアキヒサの別な顔を知り妙に納得していた。

「猟師なのは解ったけど、どうして山で狩りをしているんだよ」

「昂った心を山に入って抑えるためだよ」

山は彼にとって住み慣れた家みたいなものだった。

「アキヒサは北欧諸国の広大な山々で狩猟をしてきた。北欧諸国の
山は世界各国の中でも群を抜いて広大だ。アキヒサはそれを見て山
に魅せられたんだ。だから、気持ちが昂ると山に籠って心を静める
んだ」

まあ、山でなければ女を抱いていると思うが、未成年の彼らに言う
必要はないと思わなかった。

「ステファンと美咲さんがもう直ぐ来ると思うから食器を片づけて
くれ」

四人は解ったと言って食器を片づけ始めた。

不良の割には他人の言う事も素直に聞くし更生の余地は幾らでもあ
ると思った。

五分くらいするとステファンと美咲さんが現われた。

美咲さんは昨日着ていた白い特攻服ではなくステファンが持っているジーパンとブラウスを着ていた。

ステファンの方も山に彼が居ると解っているのかジーパン姿だった。

「山に行くんでしょ？」

「うん。たぶん今は白神山地か赤石山脈の山小屋で鹿か鳥を撃ってるんじゃないかな？」

ステファンの質問に答えながらフライパンを器用に動かして目玉焼きを焼く。

「山？おっさんは山に居るのか？」

美咲さんが聞いてきた。

「その辺は四人に聞いた方が速いよ。彼らには話したから」

美咲さんは四人に聞き始めた。

四人は検圧に戸惑いながら答え始めた。

「おっさんが猟師……………」

美咲さんはアキヒサのもう一つの顔に驚いていた。

「さあ、出来たよ。しっかり食べて体力を着けないとね」

ステファンと美咲さんの分を作り終わると自分の分はトーストだけを焼いた。

「白神と赤石どっちかしら？」

立ったまま紅茶を飲みながら聞くステファン。

「恐らく赤石だね。あっちには彼の山小屋があるから」

なるほどステファンは言って紅茶を一口飲んだ。

「山に行くとなると私たちも猟銃を持って行く？」

「そう、だね。そうしようか」

私は頷くとトーストを齧ったまま立ち上がりライフルを仕舞っている自分の寝室へと向かった。

ダイヤル式の鍵を開けて金庫に入っていた猟銃を取り出す。

私の愛用しているのはレミントンM700BDLボルトアクション式ライフルだ。

M700をカスタムしたライフルで長い年月を共にしてきた。

ステファンが使用する散弾銃はロンドンの老舗ライフルメーカー、ホーランド・ホーランド社の水平二連式散弾銃だ。

王室御用達のライフルメーカーで彼女の父が生前に残した唯一の形見でもある。

弾をポケットに詰め込んだ。

本当なら弾とライフルは別々にするのが、法令で定められているが私には法律など関係ない。

トーストを半分まで食べながらボルトをコッキングさせて始動するか確かめてホーランドの方も上下させて確かめた。

ライフルを準備して部屋を出てキッチンに行くと既にステファンと美咲さんは朝食を終えていた。

「はい。ステファン」

ステファンに二連式散弾銃を渡す。

「ありがとう。ダーリン」

礼を言いながら自分で操作して確かめた。

私は箱型弾倉にウィンチエスター357マグナム弾を込めた。

五人は私たちの様子を黙って見ていた。

五分ほどで準備を終えて私たちはクーラーザーから出て車に乗り込んだ。

ミニ・クーパーSではなく大学に行った時のFX4、ロンドン・タクシーに乗って、だ。

エンジンを始動させてロンドン・タクシーを発進させた。

「これから行く所は獣も出るし毒蛇も居る山奥だから気を付けなよ」
後ろの五人に忠告しておく。

「その赤石って山はどんな所なんだ？」

リーゼント頭の青年が質問してきた。

「長野県、山梨県、静岡県に跨って連なる山脈だよ。通称は南アルプスって呼ばれていて古くから猟で生計を立てている人たちが居る場所だよ」

今では猟で生計を立てる者は少ないが、稀に猟だけで生計を立てている者もいる。

「まあ、かなり山奥だから二、三日は掛ると思うから覚悟しておいた方がよいよ」

四人は顔を顰めたが、美咲さんは覚悟していると言った。

こういう時に女は強いと思う。

好きな相手に会う為なら、どんな試練も乗り越えられる。

それに比べて男は軟弱だ。

「……君ならアキヒサに会えるよ」

彼女の覚悟を私はしっかりと受け止めて答えた。

第十二章：二人に幸あれ

高速を使い二時間程度で山梨県に到着した。

高速を降りて必要な物を買う事にした。

近くのスーパーに行き二日分の食料と水を買って車に詰め込む。

荷物を詰め込んでから再び車を走らせて山道に入る。

ガタガタ

四輪駆動でないため揺れが激しかった。

「今回の報酬で四輪駆動の車を買おうか？ステファン」

助手席のステファンに言う。

「賛成だわ。お尻が痛くて叶わないわ」

ステファンは痛いと言ってお尻を撫でた。

四人組の方は酔ったのか予め渡しておいたナイロンの袋に顔を埋めていた。

美咲さんだけは平然とした顔でいた。

「君は酔わないのかい？」

「…………おっさんに会うまでは全て耐える」

かなり我慢しているのが解った。

「そう」

私は運転に集中した。

十分くらい行くと黒い1980年代のシボレーC/Kがあった。

「アキヒサの車だ」

私がポツリと言うと美咲さんは後部座席から身を乗り出してシボレーを見た。

シボレーの隣に止めて降りた。

「ここからは歩いて行くよ」

荷物を取り出しながら言った。

コートを脱いでサイレントコート・リアルツリーハードウッズと呼ばれるコートを着てソフト帽の代わりに迷彩柄のジャングル・ハットを被った。

レミントンM700BDLを右肩に掛けた。

ステファンの方はアメリカンクラシックハンター・ジャケットに黒いハンティング・キャップを被った。

ホーランドの水平二連式散弾銃を私とは違い両手で持った。

「君ら四人は二日分の食料を持って私に着いて来て」

美咲さんはステファンと一緒に行動するように言った。

四人は言われた通り食料を背中に背負った。

「これから行くのは獣道と言われる動物が作った道だ。そこを通ればアキヒサの小屋には二日で行ける。だけど、獣が出る可能性もあるから油断しないように」

五人は真剣な顔で頷いた。

「それじゃ行こうか」

私我先頭に立ちステファンが殿を務めて進んだ。

獣の足で作り上げられた道は人工的に作られた道と違い狭い。

その為、茂みが目の前を覆っているから私は、アキヒサから貰ったグルカナイフで茂みを切り開いて進んだ。

「彰久さんはここを通ったのか？」

四人組の一人が聞いてきた。

「うん。通ったね。微かだけど匂う」

匂う？という返答に四人は首を傾げた。

「鼻が良いんだよ」

笑って答えてグルカナイクで道を切り開いた。

一時間ほど進むと辺りが一層暗くなった。

左手に填めたデジタル時計を見ると午後6時を回っていた。

このペースで行けば明後日の昼頃には山小屋に着く。

「今日はここまでかな」

私の言葉を聞いて四人は地面に腰を下ろした。

美咲さんの方は座らずに木に寄り掛かった。

「ステファン。私は薪を取って来るから、食事の準備を頼むよ」

了解と言ってステファンは四人から食料を取ると食事の準備を始めた。

私は少し遠くに行き薪を拾い始めた。

燃え易い乾燥した木を探して手に持つ。

何本目かの薪を拾おうとした時だった。

ガオオン！！

大きな遠吠えが背後から聞こえた。

咄嗟に横に跳び肩からレミントンを両手に持ち返して振り返る。

背後にはヒグマが仁王立ちして私を睨んでいた。

どうやら知らず内に縄張りに入っていたようだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

私はヒグマを刺激しないようにしながら、ゆっくりと懐から冷凍の牛肉を置いた。

静かにヒグマを見たまま後ずさりした。

熊と遭ったら下手に刺激しないで何か食べ物静かに床に置いて背を向けずに立ち去るのが良い。

背を向けて走ると獲物と判断し襲って来る。

死んだ振り何かしたら、それこそ愚行でしかない。

獲物と勘違いして襲そわれて頭を鋭い爪で抉られ腸を牙で食い千切られる。

ヒグマは私を睨んでいたが冷凍の牛肉を見て、そちらに食い付いた。

私はゆっくりと静かに立ち去った。

ステファン達の方に戻るとステファンが心配そうに駆け寄ってきた。

「大丈夫？ダーリン」

「熊の雄叫びが聞こえたから心配してたわ」

「ヒグマに遭ったけど、何とか逃げて来たよ」

四人は熊と聞いて腰を抜かしていた。

「今夜は交代制で番をしないとね」

そうだね、と言って私はジャングル・ハットを取って顔を扇いだ。

額には汗がビッシヨリと流れていて髪が張り付いていた。

「・・・・・・・・・・」

私とステファンを黙って美咲さんは見ていた。

火を起こす為に拾っていた薪はヒグマの縄張りに置いて来てしまったから仕方なく再び拾って来た。

薪に火を点けた新聞をくべると直ぐに燃え出した。

オレンジ色の炎が周りを明るく照らして温かった。

今夜の食事はコンビーフの缶詰と魚肉ソーセージにインスタント・ラーメンとコーヒーだ。

ズルズル

ガツガツ

ラーメンを嚼る音やコンビーフなどを食べる音が山の中で木霊する。

四人は直ぐに食べ終わると寝袋に入り眠ってしまった。

慣れない山道で疲れてしまったようだ。

美咲さんの方はコンビーフを食べると食事を終えてしまった。

「食欲がないのかい？」

私が聞く。

「……あんまり」

ボソリと答える美咲さん。

「ねえ。ダーリン。アキヒサはどうしてるかしら？」

ステファンがアキヒサの事を聞いてきた。

「たぶんだけど、まだ狩りをしてるんじゃないかな」

狼男の彼を考えると夜の方が活発になると思ったからだ。

「……おっさんは、夜行性なんだ」

美咲さんが小さく呟いた。

「狼は夜行性だからね」

「……ねえ。おっさんの事を詳しく話してくれない？」

自分が知らないアキヒサの事を知りたいと言う美咲さん。

「……分かった。まず最初に言うとおアキヒサは元人間だったんだ」

最初から狼男ではなかったと説明する。

「じゃあ、どうやって狼男になったんだい？」

「それは“伯爵様”の力でだよ」

「“伯爵様”？」

聞き返してくる美咲さんに私は頷いた。

「そう。私とアキヒサの主人だよ」

「……その人がおっさんを狼男に？」

「まあ、もっと詳しく言えばアキヒサ自身が自分から望んでなったんだよ」

“伯爵様”は彼の底に眠る野性を少し刺激しただけだと言った。

「おっさんの野性？」

「そう。彼には元から常人にはない物を持っていたんだよ」

それが彼を変えたと言う。

「……あんだ達も同じ？」

「そうだよ。私もステファンも常人にはない野性を持っているよ」

「……」

美咲さんは無言になった。

表情は無表情に近かったが瞳が迷っている事を物語っていた。

「狼男は、獣人。私たちがみたいに獣になれる者を言うんだけど、群を抜いて強い」

五感に優れ鋼のように強靱な肉体を武器に戦う狼男は獣人の中でも一種の王として崇められている。

「アキヒサは、その狼男の野性を持っていたんだ。これは、ある意味で彼にとっては幸せだったと思うよ」

「……幸せ？」

「人間だった頃の彼は酷く惨めだったらしいんだ」

それが野性に目覚めた事で変わったと言った。

美咲さんに言った所で何かが変わったりする訳でもないが話さなければいけないと思ひ話した。

「……………そう」

美咲さんは短く言った。

「……………話してくれて、ありがとう」

礼を言うと美咲さんは渡しておいた寝袋に包まって眠った。

「……………ねえ。ダーリン。彼女とアキヒサさん。どうなるのかしら？」

ステファンの問いに私は何も言えないと答えた。

彼らがこれからどうなるか、それは私には分からない。

ただ、願わくば二人が幸せになる事を祈るばかりだ。

「……………二人が幸せになれる事を祈るわ」

ステファンはポツリと呟くと散弾銃を肩に当てて眠った。

一人起きる私は炎をじっと見ながら小さく溜め息を吐いた。

第十三章：ウールヴヘジンの再会

風が吹き草木が揺れ始めた。

明朝7時。

鳥たちがざわめく中で私は浅い眠りから目を覚ました。

あれから一人で番をしていたが結局は寝てしまった。

誰も番をしなかった焚火を見る。

火は弱くなっていたが、まだ消えていなかった。

「ふぁーあ」

小さく欠伸をして腕を伸ばす。

ステファン達を見たがステファン達はまだ眠っていた。

私は新しい薪に火を点けて火を強くした。

パチパチパチ

小さく弾ける音を立てながら私はインスタント・コーヒーを作り始めた。

アルミ製のヤカンに買ったミネラル・ウォーターを入れて脚立を使いヤカンを吊るして湯を沸かす。

その間に私はステファン達を起こした。

「…………おはよう。ダーリン」

「…………おはよう」

未だ眠たそうな顔をしながらステファンと美咲さんは目を覚ました。

しかし、四人はまだ眠り続けていた。

仕方ないので空に向かって一発を撃った。

ダアッン！！

青い空にウィンチェスター357弾の銃声が木霊した。

銃声を聞いて五人は何事かと慌てて眼を覚ました。

それと同時にステファン達の意見も覚醒した。

「おはよう。直ぐに食事をして出発するよ。そうすれば夕方には着ける」

眼を見張ったままの四人に言う。

何が何だか分からないと言った顔だったが、気にせず朝食の準備を始めた。

美咲さんの方は少し隈があった。

時々、眠りから覚めたのを知っている。

それも呻き声を上げながら………

きつと銀星会でのアジトでの事を夢見たと手に取るように分かった。

しかし、敢えて無視して気付かないようにした。

彼女を救えるのはアキヒサを除いて他に居ないからだ。

一刻も早くアキヒサに会わせたいと思う気持ちが強くなる。

朝食はポロニア・ソーセージと焼いたチーズにインスタント・コーヒーという簡素な物だがエネルギーを摂取するには持って来いの食事だ。

十分ほどで食事を済ませると火を消して歩き始めた。

誰も喋らずに無言だった。

無駄に体力を減らさない事を昨日で学ぶとは中々だと思う。

獣たちが固めた道を歩きながら私はアキヒサの匂いがしないか周囲を確認した。

獣道を歩いているため猪やら鹿やら熊などの匂いが混ざってアキヒサの臭いを探すのに苦労した。

更に風が吹くせいで遠くから来る臭いも混ざって混乱した。

だが、思わぬ幸運を風が運んで来てくれた。

「……アキヒサの匂いだ」

微かに風の向く方向からアキヒサの匂いを感じ取った。

しかも、それほど離れていなかった。

「おっさんが近くに居るのか？」

美咲さんが私の小さな声に敏感に反応した。

「……微かだけど彼の匂いがする」

私はチラリと見るとステファンは頷き美咲さんも頷いた。

四人組も遅れながら頷いた。

全員が頷くのを見て私は匂いがする方向へ走った。

後ろに気を使いながら私は匂いがする方向へと走り続けた。

獣道を擦り抜けて行くと川の流れる音が聞こえた。

茂みを抜けると綺麗な水と緑が延々と広がる溪流があった。

大きな岩の上に立つ一人の人型が見えた。

熊の毛皮を被った男は右手に竹で作られた溪流竿を持ち獲物が掛る

のを待っていた。

リールはなかった。

左肩には第二次世界大戦でドイツ軍が使用していたボルトアクション式ライフル、モーゼルkar98kを掛けていた。

右腰に付けたヒップ・ホルスターには黒い銃口が抜き出たS&am
p・W M629マウンテンガンで左腰にはナイロンの鞘に入った
ジャングル・キングと熊の皮で作られた袈裟掛けが差されていた。

間違いない。

……アキヒサだ。

一歩踏み出そうとした時だ。

彼の竿が僅かに動き縦長の浮きがピクン、ピクンと動いた。

獲物が食い付いたと分かった。

彼は微動だにせず竿を高く上げて用意した玉網で救い上げた。

元気がある岩魚だった。

「相変わらず良い腕だね。アキヒサ」

ピクンとアキヒサの肩が揺れた。

暫く背を向けていたが少しして振り返ってくれた。

「……もう追って来たか。流石だね。マーロウ」

アキヒサは苦笑とも微笑とも取れる笑いを漏らした。

頭から熊の毛皮を被ったアキヒサの格好は、東北地方の有名な狩人、マタギのように見えた。

「まあね。こっちの娘さんが君に会いたがっているよ」

私はチラリと後ろを振り返った。

四人を押し退けて美咲さんが出てきた。

「……おっさん」

美咲さんの歡喜に満ちた声。

「……美咲」

それとは対照的にアキヒサは悲しげな眼をしたが直ぐに打ち消して釣った岩名を竹で作った魚籠に入れると静かに背を向けた。

「……おっさん!!」

美咲さんの悲しそうな声が山に響いた。

「取り合えず私の家に来なさい。話しはそれからだ」

背を向けたまま答えるアキヒサに私とステファンは小さく息を吐い

た。

石から石へと軽々と跳び越えて行くアキヒサに私たちも続いた。

彼が歩いた場所を行けば安全だからだ。

黙々と山道を進むアキヒサ。

自分勝手に見えるが、ちゃんと後から来る私たちを考えて道を作ってくれていると分かる。

美咲さんの方をチラリと見ると、ずっとアキヒサの背中を見ていた。

彼女にはアキヒサの背中が無言の拒絶を表していると見ているようだが、私から見れば拒絶ではなく戸惑いを表していた。

彼女が、ここまで自分を追って来るとは思っていなかった。

だが、彼女は追って来た。

その事に戸惑っているんだ。

『……これからどうなる事やら』

私は不器用な二人がどうなるか真剣に悩み始めた。

30分ほど山道を歩くと一件の丸太小屋が見えた。

右端に黒い煙突がニョキリと黒漆で塗られた三角形の屋根から出ていてドアの真上にはトナカイの頭蓋骨が飾られていた。

アキヒサはドアを押して中に入った。

私たちも追って中に入る。

「適当な場所に腰を下ろしてくれ。コーヒーでも淹れる」

モーゼルと竿と魚籠を端に置いてヤカンを沸かし始めた。

私たちはテーブルの椅子に座った。

部屋の中は小綺麗に整理整頓されていた。

一階にはテーブルとイス、暖炉と簡易なベッドとキッチンが置いてあるだけだった。

左端には梯子があり二階へと通じるようだ。

彼は人数分のコーヒーをデコボコしたカップに淹れてくるとテーブルの上に置いてくれた。

「少し飲んでいてくれ。釣った魚を燻製にしてくる」

アキヒサは竹の魚籠を持つと小屋から出て行った。

そんなアキヒサを美咲さんは瞬きもせずに見続けていたが、不意に立ち上がるとアキヒサを追って小屋から出て行った。

「あの二人。何とかなると良いけど」

私は小さく息を吐いてから彼が淹れてくれたコーヒーを口にした。

濃くのあるブルーマウンテン豆を使っている。

水も良質な水で味が口の中で冴え渡った。

ステファンの方もコーヒーが美味しいのか優雅に香りを楽しんでいった。

四人の方は美咲さんの方と部屋の中が気になるのかソワソワしているのがチラリと見えた。

「あんまりソワソワしない方が良いよ」

私はコーヒーを飲みながらキャメルを取り出して銜えた。

「私たちが何を騒いでも無意味なんだから」

銜えたキャメルにジッポ・ライターで火を点けた。

「でも、彼らの気持ちも解らなくはないでしょ？」

ステファンは四人組に同情的な発言をした。

「まあね。だけど、ここからは当事者同士の問題だよ」

私たちは彼女をアキヒサの所まで連れて行った。

力になるとは言ったが、ここからはもう手は貸せないと思う。

「まあ、大丈夫だと思うよ」

不安そうなステファンと四人組に今の美咲さんならアキヒサを説得できると思った。

フウー

煙を吐いてコーヒーを飲んだ。

煙草を吸った後だと更に濃くが増した気がした。

最終章：地獄の果てまで

一時間ほど煙草を吸いながら待つとアキヒサと美咲さんが戻ってきた。

「・・・まったく。君みたいな無鉄砲な女性は初めてだよ」

ドアを開けて中に入ってきたアキヒサは、さっきまで思い詰めていた表情とは打って変わって弾けた表情だった。

「何さつ。一人で勝手に思い詰めていたくせに!!」

美咲さんの方も思い詰めた顔から怒った表情で入ってきた。

怒っていたと言っても瞳は笑っていた。

「お帰り。アキヒサ。どうやら上手く言ったようだね」

私は三本目のキャメルを銜えながら笑った。

「上手くもこうも、この娘が余りに煩すぎるから大人の私が妥協したまでだ」

笑いながら喋るアキヒサ。

「何が大人よ!!子供みたいに頑固だった癖に!？」

美咲さんは笑うアキヒサを怒った。

「そんなに怒鳴らなくても聞こえているよ。あんまり大きな声を出さないでくれ。耳が詰まる」

はあ、と溜め息を吐きながらアキヒサは二階へと通じる梯子を登り始めた。

「今日は遅い。ここに止まりなさい」

少し寝床を準備すると言って二階へと消えるアキヒサ。

「……………上手く説得が出来たようだね。美咲さん」

私の言葉に美咲さんは何も言わずに深く一礼してきた。

「……………ありがとう。あなたのお陰だ」

「私のお陰じゃないよ。全ては君の力がやった事だ」

キヤメルにジッポで火を点けながらぶつきら棒に言った。

ステファンはクスリと笑ったのに気が付いた。

私が照れ隠しをしているのを見破ったようだ。

「あれからおっさん……………彰久と話し合ったんだけど……………彰久に着いて行く事に決めた」

地獄の底までも、と言う美咲さん。

これを聞いた四人組は複雑な表情をしていた。

少なからず好意を抱いていた相手が憧れていた男に取られる形で心は複雑なのだろう。

その他に地獄の底まで、と縁起でもない言葉を聞いたのも含まれていると思う。

「地獄までとは恐れ入る。……まあ、それ位の覚悟がないと彼の相手が務まる訳ないか」

ステファンもそうね、と相槌を打った。

5分くらい話しているとアキヒサが呼ぶ声がした。

呼ばれて梯子を登り二階に行くと七人分の簡易なベッドが用意されていた。

「私は下で寝るから君らは二階で寝てくれ」

女性には悪いが、と謝る事をアキヒサは忘れなかった。

そんな性格が女心を擽るのを知らないのか？

「……貴方の性格は無意識だから性質が悪い」

はあ、と溜め息を吐きながら私は煙を吐いた。

「？まあ良い。それより飯を作るから手伝ってくれ」

私の言葉に首を傾げながらアキヒサは昨日、狩った猪の肉をベース

に鍋を作ると言った。

「OK。それじゃ、下に行こうか」

皆で下に降りた。

四人組は寝ていても構わないとアキヒサが言うと再び二階へと上がって五分も経たない内に寝てしまった。

美咲さんとステファンは下に降りてテーブルで談笑していた。

二人して私とアキヒサの良い所を言い合っているようだ。

その事を考えると二階で泥のように眠る四人組は幸せだったのかもしれない。

誰が好き好んで好きな女が男を褒める話しを聞きたがる。

そんな女性二人に背を向けて私とアキヒサは料理の準備をしていた。

作るのは猪のステーキと豚汁だ。

キッチンの下にある戸棚から解体した猪の肉を取り出し人数分に切り分けるアキヒサとは別に私は用意された野菜を水洗いして切った。

野菜はジャガイモ、シシトウ、シメジだ。

豚汁の方はネギに豆腐とゴボウに大根と人参だ。

「ところで何時まで日本に居るんだい？」

ジャガイモの皮を丁寧に切りながら隣で猪肉を火で焙るアキヒサに聞いた。

「今回は半年だ。“伯爵様”からも傷の治療に専念するようにと言われたからな」

実際は傷など一週間で回復するが、敢えて半年の休暇を与えた“伯爵様”の考えに私はなるほどと思った。

「半年、か。それなら十分な時間だね」

アキヒサは解っていたのかああ、と頷いた。

「ねえ。何が十分な時間なの？ダーリン」

ステファンが背中越しに聞いてきた。

「ん？美咲さんを立派な淑女に仕立て上げる時間だよ」

ああ、なるほどと頷くステファン。

対して美咲さんは首を傾げていた。

「美咲さん。これから君には色々覚えてもらう事になるよ」

私は手を止めて白いタオルで手を拭いてから振り返った。

「アキヒサは知っていると思うけど世界を股に掛ける武器商人だ」

これには美咲さんも解っていると頷いた。

「武器商人というのは裏世界だけでなく社交界にも顔売らなければならぬんだ」

社交界で顔売れば自然と商売の話が浮き上がるものだ。

「まあ、その他にも何れ行くと思うけど“伯爵様”の屋敷で開かれるパーティに参加しないといけないから」

「それで君には彼の連れ添い役として申し分ないようにしてもらわなければいけない」

そうしないとアキヒサの顔に泥を塗る事になると言つと美咲さんの顔は真剣な顔を更に真剣にさせた。

「おい。彼女を追い詰めるような発言は控えてくれ。この娘は根を詰め過ぎる性格なんだ」

アキヒサが少し咎める口調で割つて入ってきた。

「美咲。私は君が淑女らしく振る舞えなくても気にしない。ありのままでもいいさ」

相田みつをの言葉を引用するアキヒサ。

しかし、美咲さんは首を横に振った。

「……気持ちは嬉しい。だけど、私は貴方の傍に立っていられる恥ずかしくない女になりたいんだ」

それは美咲さんのプライドでもあると感じた。

男の後ろを歩くより肩を並べて歩きたい。

それが美咲さんのプライドなのだ。

「……分かった」

アキヒサは暫く美咲さんを見つめていたが頷いた。

ありがとうと言って美咲さんは微笑んだ。

とても屈託のない優しい笑顔だ。

私とステファンは顔を見合せて小さく笑い合った。

それから二人も混ざってカップル仲良く猪のステーキと豚汁を作り上げて四人を起こしてから食事を始めた。

猪の肉は火が奥まで通っていて、とても美味かった。

食事を済ませた後はアキヒサが作った露天風呂に入った。

もちろん男子は男子で女子は女子同士で、だ。

露天風呂は小屋からそんなに離れていない場所で木の屋根と壁があってサウナの役割もしていた。

「あー、良い湯だ」

アキヒサは肩まで湯に浸かりながら息を吐いた。

銀星会のアジトで受けた傷は既に塞がっていた。

男の裸に興味を持つような変態趣味は持ち合わせていない私だが、アキヒサの肉体には目を見張るものがある。

人狼である事から彼の肉体は常人よりも遅しく野生の気が溢れ返っていて魅力を感じられずには入られなかった。

「半年間どうするんだい？」

「山を降りてから考える」

まあ、気軽な休みにするさと言うアキヒサ。

四人組は、さつきから何やら何かを言おうとしているが迷っていた。

「君ら何か言いたい事があるなら言った方が良い」

私の言葉に四人は意を決したのかアキヒサに頭を下げた。

「お願いします。俺らも連れて行って下さい！！」

「俺らも美咲さんと同じくアキヒサさんの供をさせて下さい」

雑用でも何でもすると言う四人組。

「君たち。私に着いて行くという事は、今の生活を全て捨てるとい

「う事だよ」

美咲にも言ったとアキヒサは四人組に言った。

「……覚悟は出来ています」

「……」

アキヒサは黙って四人を見た。

彼らの瞳は本気だった。

「……分かった」

ただし、最初はマールロウの傍で働いてからだと言うアキヒサ。

勝手に人に押し付けなくてくれと言いたかったが、ここは目を瞑ろうと思ひ渋々ながら了承した。

「やれやれ。これから忙しくなるな」

私は小さく溜め息を吐いた。

しかし、嫌な溜め息ではなく何処か楽しげな溜め息だった。

エピローグ：狼の遠吠え

翌朝、私たちはアキヒサの呼び声で目覚めた。

彼は既に着替えを済ませていて山の中をジョギングしていたらしい。相変わらず元気のある男だと呆れた。

朝食は昨夜の岩魚の塩焼きと山形の郷土料理のだしだった。

朝の7時に朝食を済ませてから山を降りた。

アキヒサが抜け道を知っていたので帰りは午前中の内に数時間で下山できた。

山を降りるまでの間、美咲さんはアキヒサから一步も離れなかった。

まるで大切な宝物を無くさないようにする小さな子供のように……

アキヒサも美咲さんの気持ちを感じているのか苦笑しただけで何も言わなかった。

下山した後、止めてあったシボレーにアキヒサが乗り込むと美咲さんも一緒に乗り込んだ。

四人組は私とステファンのロンドン・タクシーに乗った。

横浜の事務所への帰り道。

私が運転するロンドン・タクシーの前を走る1980年代の黒光りのシボレー。

チラリと窓ガラスから見えるのはアキヒサと美咲さんが仲慎ましく話し合っている姿が見えた。

何を話しているか分からないがアキヒサが美咲さんの言葉を聞いて笑う姿が見えた。

とても仲が良く幸せそうだ。

「……二人とも幸せそうね」

助手席のステファンの言葉に私は頷いた。

「うん。本当に幸せそうだ」

恐らく、そう遠くない未来。

彼らは結婚する事だろう。

その時は私とステファンが立会人となり祝福しようではないか。

まあ、その前に私とステファンの結婚式で立会人になってもらい祝福してもらおう積りではある。

彼と美咲さんのキューピッド役をやったんだから報酬としては文句ないだろう。

「私たちも幸せになりましたよね？ダーリン」

私の考えを読んだ如く喋るステファン。

そんなステファンに私は頷いて微笑んだ。

「もちろん。幸せになりましたよ。奥さん」

私は後ろの四人に気を使う事もなくステファンの唇を奪った。

ステファンは目を見張ったが直ぐに眼を瞑ってくれた。

チラリと左眼で前を見るとアキヒサと美咲さんも唇を重ねていた。

四人は窓ガラスから見える景色を眺めたり寝た振りをするなどして気を使ってくれた。

気が効くと良い事だと思いながら私はアクセルを踏んでギアを変えた。

ギユウウウウン！！

エンジンがフル回転する音が高速道路に響き渡った。

フル回転する音は、まるで獲物を仕留めて狼が天に高々に遠吠えを上げているように聞こえた。

その遠吠えは間違いではなかったのかもしれないと私は思いながらダッシュ・ボードを開けてカメラを取り出して口に銜えた。

窓ガラスから見える空が何処までも青かった。

登場人物紹介：私立探偵 マーロウ

名前：渡辺謙一

種族：人間

年齢：23歳

国籍：日本

職業：浪人生、運転手、私立探偵

階級：不明

服装：灰色の背広にグレーのトレンチコートにグレーのソフト帽

性格：謙虚、誠実、皮肉屋、優しい

容姿：黒のセミロングに茶色の瞳に浅黒の肌

髪型：セミロング

身長：178cm

体重：65kg

利き腕：右利き

趣味：ドライブ、車弄り、車洗い、狩猟

車：BMW ミニ・クーパー・S（MT車、紺色）、FX4ロンドン・タクシー（MT車、黒色）

愛称：小僧、坊主、謙一、ドライヴァー、車小僧、マーロウ

装飾品：ロレックスの腕時計

嗜好：酒、カクテル、キヤメル煙草

好きな物：車でドライブする事、恋人の膝枕

嫌いな物：浪人時代の友人、振った女

愛拳銃：ベレッタM1934（オートマチック）、ワルサーP38（オートマチック）

愛刀剣：ガーバー社のフォールディング・ナイフ

人物：三回受験に落ちて恋心を懐いていた相手に間接的に振られ更に契約していたアパートからも追い出されるといふ踏んだり蹴つたりの状態の所を“伯爵”に見つけられた。

身の上を話して“伯爵”がスポンサーとなりアメリカのボストン大学に現役で合格して日本の大学ではない学生ライフを送った。

大学を卒業後はアメリカのピンカートン社に入社して探偵として活躍して裏世界の事情も知り“伯爵”の傘下に入った。

その後、魔界から何らかの事情で逃げ出した悪魔を搜索、捕縛か射

殺する悪魔探偵になった。

事務所は横浜の港に浮かぶ中古のクルーザーで恋人のステファンとの二人暮らしをしている。

拳銃は古臭いベレッタを使用しているが命中率は極めて高く射程距離外でも的に当てる事が出来る。

悪魔探偵になってからはワルサーも愛用するようになり大掛かりな相手となるとアサルトライフルなども使うようになった。

恋人は相棒でもありフラメンコの足と言われるほどの超美脚を誇っていて街仲をデートすると必ず男の視線が来る。

日本に来る時でも常に拳銃とコートと帽子のスタイルは崩さないで変な目で見られるが彼なりの拘りがあるらしい。

フィリップ・マーロウに強い憧れを抱いていて“男はタフでなければ生きていけない。優しくなければ生きる資格はない”を信条にしている。

恋人のステファンからはマーロウなどと言われている。

探偵という人のプライバシーを覗く仕事をしている為に皮肉な発言をする事が多く相手の神経を逆撫でする事が多い。

またキツネの獣人でもありヴェーア・ヴォルフと言われる騎士団の一員でもあるが詳しい詳細は不明。

登場人物紹介：相棒 ステファン

名前：ユニファア・フェゼルス・ステファン

種族：人間

年齢：23歳

国籍：イギリス

職業：助手、秘書

階級：不明

服装：灰色の背広にグレーのトレンチコート

性格：大胆、優しい、冷酷、毒舌

容姿：金髪のロングに碧色の瞳と白絹の肌

髪型：オールバック、ポニー・テール

身長：170cm

体重：50kg

利き腕：右利き

趣味：ドライブ、昼寝、狩猟

車：BMW ミニ・クーパー・S（MT車、紺色愛称：ステファン、
フラメンコ嬢

謙一の呼び方：マーロウ

装飾品：コーチの腕時計

嗜好：酒

カクテル

好きな物：恋人の膝枕、恋人の手料理

嫌いな物：麻薬、闇金、ヤクザ

愛拳銃：ベレッタM3032（オートマチック）、ワルサーPKK

オートマチック

愛刀剣：ガーバー社のジャック・ナイフ

人物：元イギリス貴族の令嬢で両親は借金を残して死亡しヤクザに
売春宿に売られそうになった所をピンカートン社にバイトしていた
謙一に助けられた。

何かと世話を焼く謙一に心が惹かれて自然と成り行きで恋人となり
同棲して暮らす様になった。

ピンカートン社から独立して探偵社を立ち上げた時は助手として活
躍するようになり知り合いからワルサーPKKを貰った。

後に日本に渡り“伯爵”と知り合い悪魔探偵として謙一の助手とし
て悪魔と戦うようになった。

鳥撃ちなどが趣味で謙一と一緒に鳥を狩猟しにヨーロッパに行くなど多く大型獣を狩る彰久とも懇意にしている。

彰久が結婚する時は夫となった謙一と一緒に行って新郎新婦を激励して夫婦仲良くするなどした。

登場人物紹介：武器商人 彰久

名前：草神彰久

種族：人間

年齢：四十歳（外見年齢は五十代）

国籍：日本

職業：営業マン、ガーディアン・デビル社の専務、武器商人

階級：不明

服装：紺色の背広、黒色のトレンチコート、黒色のソフト帽にサン
グラス

性格：誠実、屈強、優しい

容姿：灰褐色のロングに琥珀色の瞳に褐色の肌

髪型：オールバック

身長：182cm

体重：75kg

利き腕：両利き

趣味：ドライブ、散歩、ビリヤード、ハードボイルド読書、狩猟、旅

車：ベントレー エイト（MT車、紺色）、シボレーC/K（MT車、黒色）

愛称：ベア・ハンター、武器商人、ウールヴヘジン

装飾品：グッチの腕時計、ニコンF801

嗜好：酒、カクテル煙草（LARK クラシック）

好きな物：バロンで飲むブルーマウンテンのコーヒー、バロンで作られたベーコン

嫌いな物：接待ゴルフ、偉ぶる上司、会社

愛拳銃：S & amp; W M28（リボルバー）、コルト・ウツズマン マッチターゲット（オートマチック）、ショート・ボウ、コルト・ガヴァメント（オートマチック）、コルト・パイソン（リボルバー）

愛刀剣：アイトール社のサバイバル・ナイフ、無名の竹割鉞

人物：マーロウの古い知り合いで“伯爵”に仕える世界を股に掛ける武器商人にして優れた猟師でもありヴェーア・ヴォルフのリーダー格にして狼の獣人。

年齢がマーロウより数倍は年上だが、身体付きは遅しく数時間前に撃たれたのに傷口が塞がるなど回復力に優れている。

また狼の獣人であるだけあって、五感に優れ身体能力も桁外れに凄く狼男になると更に強くなる。

マーロウが追っていた悪魔に女総長を攫われた事でマーロウとアジトに乗り込み悪魔と一騎討ちで倒す。

しかし、血に濡れた腕で総長を抱けないと言いつ夜の闇へと姿を消したが、マーロウの調査で南アルプスで発見される。

その後は女総長、美咲と話し合い共に生きて行くと決意し仲良く帰宅した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5728g/>

ミッドナイト・ディクティブ 真夜中の探偵

2010年11月12日07時22分発行